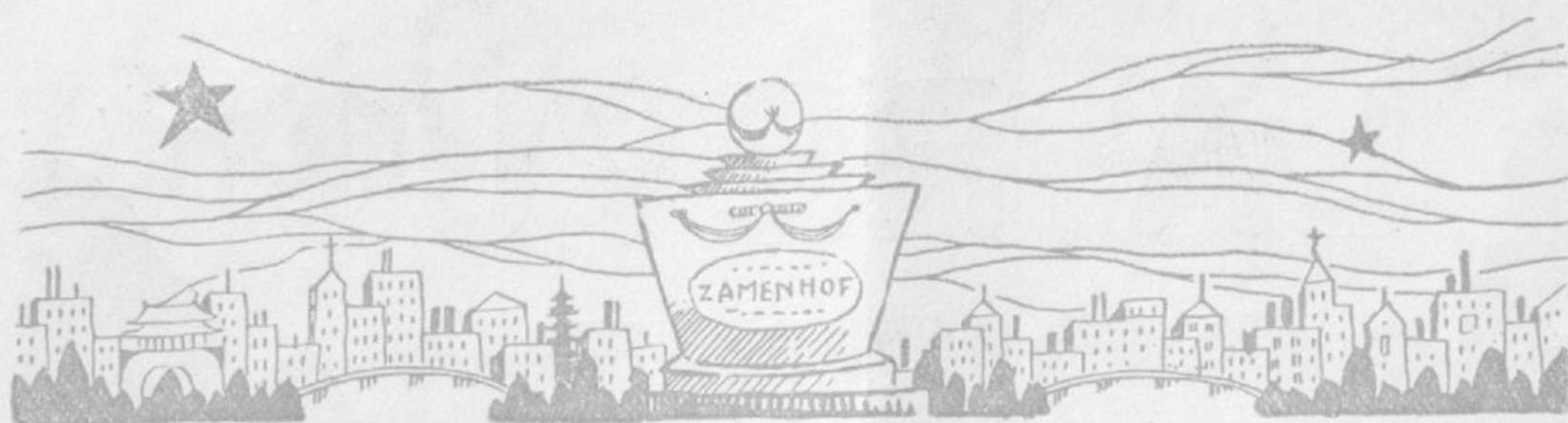
Jaro X, N-ro 5

Majo, 1929

LA REVUO ORIENTA





第十年　　　　第五號

目　次 (ENHAVO)

表紙——江上武夫　　飾繪——大橋介二郎

例會兼研究會

日時場所——毎水曜午後7時から學會で
會　費——無料。
用　書——Marta

五月會話練習會

日時——5月18日（第三土曜）午後正7時
場所——丸ノ内鐵道クラブ（永樂町電停より南へ折れ日活本社横手より右折せる奥の二階建木造）
話者——鐵道漫談——井上萬壽藏氏
話の後で會話の練習を致します。
會費——五錢（初學者も歡迎）

常設講習會

◆初等科　5月6日より開講 一ヶ月半終了。
日時——毎週月水曜兩日午後7-9時
場所——學會階上講習室
會費——全期2圓（全納の事）
◆中等科（隨時入會可）
日時——毎週金曜午後7-9時
場所——學會階上講習室
會費——毎月50錢（前納の事）
用書——Andersen, Fabeloj II.

五月遠足會

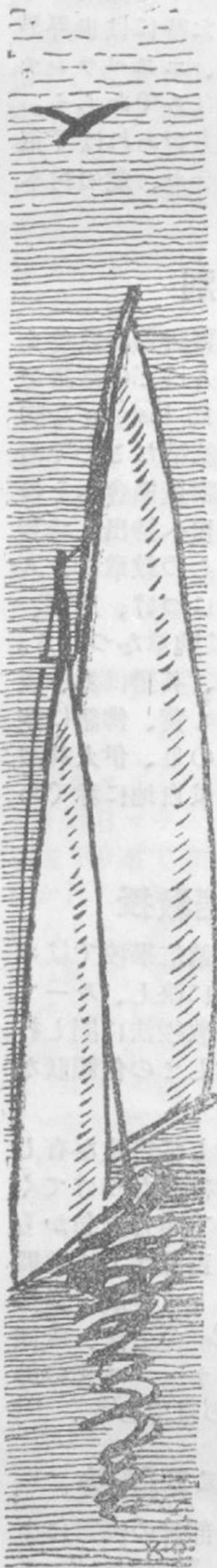
4月26日（日）正午新宿驛前集合。小金井附近の古跡見物をして同志井上萬壽藏氏宅を訪問する豫定。會費電車賃約50錢。

東京市牛込區新小川町3の15　財團法人日本エスペラント學會



La Revuo Orienta

JARO X, N-RO 5 MAJO, 1926



スローガンの書換え

千葉醫大助敎授 鈴木正夫

我が國の國語が現在の主要諸外國の夫れと懸絶した差異があるために、すべての種類の對外文化交渉に於て我國の受ける不利益損失に就ては今更喋々するを要しない。外交場裡に於ける我國代表者のみぢめな役者振りは餘りに有名な事だし、商業にしろ工業にしろ又我々のたづさはつてる學術上の交渉にしろ叙上の理由に依る我日本國民の不便不利は計り知られない。而もこの不完全極まる交渉への準備にすら我々が捧げる國民教育の犧牲——外國語學習への精力割打が如何に大なるかは之亦識者ならずとも周知の事柄である。

之に對する救策が果してないだらうか？否明かに存在する。夫は我國の對外交渉語として Esperanto を採用する事である。今日本がそのすべての對外交渉に Esperanto を使用する事を中外に宣言するならば、外交實業學術その他あらゆる範圍に於て持つ現時日本の世界的重點は、諸外國をして否應なしに彼等の我に對するに Esperanto を採用させるに至る事は明瞭である。然る上は叙上の我國の損失は著しく輕減される。

所がこの明かな事實が neesperantista の識者に了解を拒まれ又は躊躇せられる理由は恐らく次の二つの疑問の爲めだと思ふ。卽ち先づ Esperanto は人造語である、我々の思想感情を盛る事が出來るであらうか？次に後になれば Esperanto に代る更に優秀な人造語が出來ないであらうか？この第一の疑問が全然杞憂であることは Esperantisto ならば誰でも肯ふ事が出來る。次の疑問だとて私は之を否定する。言語などゝ云ふものは自然科學發明物と異なり改良に依て優秀になるものでない。Zamenhof の天才と精進とを顧みるならば私は斷々乎として後世 Esperanto に優る國際語なきことを言ひ得る。假に百歩を讓ても人は屢々電燈の現はれるのを想像して洋燈を行燈に代らしめない愚を以て比諭する。（併し之は中らない事上述の如しであると私は信ずる）兎に角叙上の二個の疑問は Esperantistoj の間では明々白々に採るに足らぬものなる事が解るのであるが Neesperantistoj には之が解らぬらしい。從て我々はすべての方面で斯語の卓越性と不代用性（Taŭgeco kaj neanstataŭebleco）を示さねばならぬ。我々の宣傳及實用は實に之に依て世の迷夢を覺し一日も早く我國對外用語として Esperanto を採用させる爲めであらねばならぬ。

我々の宣傳の Slogano は今迄「Esperanto を小學又は中學に導入せよ」であつた。之は勿論然るべきであらう。諸外國でも之を目的にしてる。併し國際語に對して日常的要求が少なく而も原理的要求がかくも大なる我日本には特殊の宣傳目標がなくてはならぬ。だから我々は Slogano を書き換えやう。「我國をして對外交渉用語として Esperanto を採用せしめよ」と。この Slogano はより直截で、より一般的である、今迄の目的は之の結果として當然行はれる事となる。この新らしい旗幟の下に我々は一層强力に一層效果的に進まうではないか。之は自分一個の私見である。本卷頭に述べたとて學會の意見であるのではない。一人の日本 Esperantisto として大方の御批判を乞ふ次第である。

海外報道

ヂュネーヴにて教育大會

7月25日から8月4日までĜenevoに於て世界教育協會の第三回大會が開かれる。Internacia Centra Komitatoの名譽會長D-ro Privatはエスペラントに關する報告をすべく招かれた。同時に同氏はU. E. A. 及I. C. K.をも代表する。I. C. K. はエスペランチスト教育者Budapestoの萬國エス大會に出席を犧牲にしてこの大會に出席するやう勸誘する決議をした。

遊覽及廣告の國際會議

3月30日から4月2日まで獨逸Frankfurt am Main市で遊覽及廣告國際會議(Internacia Konferenco por Turismo kaj Reklamo)が開かれる。この會議は同市企劃部及國際見本市により復活祭を利用して招集されたのであるが、用語は各國語で唯エス語にのみ飜譯せられる。又同日に第17回獨逸エス大會がFrankfurt a. M. に開かれ、互に協議の結果この會出席者はエス大會にも無料參加し得られ、同樣エス大會出席者も會議に出席し得ることになつた。

同會議には2000通の招待狀が各國商業會議所企業組合等へ發せられた。

エスペラントが國際會議に用ひられたのはヂユネーヴの教育者會議を始めとするがその後、ヴエニスの第回商業會議、ヂユネーヴのラヂオ會議、パリーの第二回商業會議等があり、一昨年にプラハにて開かれた教育會議(Paco per Lernejo)には400名の出席者中エスペラントは250名、他の150名も特にエス語を勉強して來たといふ成功を收めた。エスペチントが世に大いに行はれるやうになつたら自分も學ばうといふことを言譯けにする非エスペランチストも多いが最早この言譯は役に立たぬ。すべての國際會議にエスペラントが公用語として絕對權威を有するは遠くない。歐洲大都會の國際見本市はすべてエスペラントを用ひて廣告をしてゐる。次にすべての學校にてエス語が正課として敎授される時には我々は遂に勝利を得たのである。

ビルマの愛の村にエスペラントを

南米ブラジルに愛の村を創立せられる米良重穗氏はビルマの川端福一氏と計り、第二の愛の村をビルマにに創立するとの事であるがこの愛の村では村民の內外人に限らず廣く募集し、公用語としてエスペラントを採用することになつた。これが實現した時には世界最初のエスペラント村となつて、エスペランチスト旅行者の必ず訪れる所となるであらう。もし同志中に同村民の希望の方があれば「東京市麴町區三番町19. 九重ホテル、愛の村本部」へ御照會の事。

國語の色別

ベルギーのブラツセル市に言語色別協會といふのが生れた。つまりこの人はどの國語が話せる人か見別けがつくやうにinsignoを胸につけやうといふので、誠に結構なことである。この協會では各國の國際聯盟協會へその趣意書を送り、行々は國際聯盟へ持出して實現を計らうと計劃してゐる。この紋章は、人間は色別の丸いinsignoを胸につけ、店頭、自働車は縦形のもの、巡査等は腕章をつける。各國語の色別は、獨逸語は黑、英語は赤、支那語は黃と白、朝鮮語は空色と黃、佛語は空色、エスペラントは白色に綠の星、伊太利語は綠、ロシヤは黑と白、日本は白地に赤であつた。

遞信學校でエス語教授

ルーマニヤ、ブカレストの遞信學校ではエス語を一課目として採用するに決し、ルーマニヤエス會はエス語課設置及敎授法に關し打合せすべき代表者を派遣すべしとの依賴狀を受けた。

この學校當局はエス語に對して好意を有し時間の餘裕のないにも拘らず都合をつけてくれた。第一回は實驗的のもので四月上旬から始まり、來學年の始めからは正課として時間表中に入れられる。敎授法としては既に賞讚の的となつてゐるAndreo Ĉeの方法、所謂Ĉe-metodoを用ひてルーマニヤ・エス會の幹事V. Timis氏が敎授するとの事である。

エストニヤ政府のエス語熱

補助金下附　エストニヤ文部省の提案により、同政府では2月22日の閣議の結果、エストニヤ・エスペラント協會に對して150クロ

ーネの補助金を下附することに決した。この金は瑞典で H. Seppik 氏がエストニヤに關してエス語講演をする準備の爲であり、尚蓄音器のレコード、映畫等も無代でこの目的の爲に與へられる。

文部省のエス語に關する通牒 瑞典の教師 E. Malgren 氏は、エストニヤ文部省に對し瑞典の少女はエス語でエストニヤの少女と通信し、又夏の休暇にはその通信相手の所に滯在することを希望してゐる旨エス語で申送つた。これに對して文部省では國内各學校當局に宛夫々通牒を發した。今日まで瑞典の少女と通信希望の少女 20 名あり。その中 6–7 名は暑中休暇に通信相手の家に滯在を欲してゐるとの事。

エストニヤ案內記 外務省ではエス語で繪入りの案內記を發行し度い意向を有してゐるがその必要の有無に疑問を懷いてゐる。これを實現せしめる爲には我々世界の同志は擧つてこの案內記を請求しなければならない。希望者は葉書で Ministerio por Ekstero, Tallinn, Estonujo. 宛に請求せられ度い。但し "Esperanto" と明記すること。

ブダペストの エスペラント演奏會

ブダペストの文藝會 La Fontaine 主催で 3月24日マチネーが音樂學院で催された。出席者400名で多數の neesperantistoj 及賓客が招かれたが何れも皆エス語の美しい發音には感心した。殊にオペラ歌手 Julia Orosz の明瞭な發音、女流劇作家 Elizabeto Gerö 及エスペラント詩人で有名な Julio Baghy の詩の朗讀や、現在人氣を得てゐる Sárossy の歌つた Grabowsky や Kalocsay の譯した歌等には一同恍惚として聽入つた。特に喝采せられたのは Maria Kende 女史で、本年萬國大會の劇にも參加するとの事である。その他ハンガリー科學々士院員で La Fontaine の幹事長たる Béla Vikár 氏はエス語の有用と普及狀態に關して面白く可笑しく說明して、笑の中にエス語を聽衆の頭に刻みつけた。

この種の宣傳法は非常に有効で、理窟拔きにして實際眼の前にエス語の belsoneco, uzebleco を證し得る。百聞一見に如かずで、いくら說法しても手前味噌と考へられるのが常であるが、實際眼で見、耳で聽けば誰でもエス語の優秀なることは認めざるを得ないであらう。

モースの電信 記號に特殊記號を

ユーゴースラヴイヤの遞信省では、技術上の不便を除く爲に、萬國電信聯合に對して、ĉ, c, ĵ, z, dr. の如きスラヴ系の發音に對して特別の記號を採用すべしと提案を出した。これに就いて鑑定を依賴せられた國際鐵道エスペランチスト協會の會頭 Stojnić 氏はこれを利用して、「これ等の記號は又國際補助語エスペラントの各相當するものにも用ひ得」の一項を書き加へた。從來は ĉ, ĝ, … の代りに ch, gh, … が用ひられてゐる。

オリンピツク 大會にエス語を利用

本年の萬國オリンピツク大會はチエコスロバキアのプラハで開催されるが、150,000 の會員を有する同國の體育協會 Orel は各國の選手を案內するにエス語を用ふることになりチエコスロバキア・カトリツク・エスペラント聯盟の援助の下に講習を開いて會員に學ばせることになつた。Orel の如き大きな協會がエス語を採用したことはエス運動に大きな力を與へるものであり、オリンピツク大會へ出場する選手は皆エス語を學んで貰ひ度いものである。因に、昨年の大會に短距離選手として出場した相澤嚴夫氏は講習を受けたこともあり相當熱心な同志である。

是非必要なロータリー侵入

最近ロータリーでは國語問題に就いて興味を持ち始め、會員に學習を推奬してゐるが、月刊雜誌 Rotary Wheel に每號エス語欄があり、斯語に關する智識を與へてゐる。更に Bournemouth に開催せられるロータリー大會には、「ロータリーは公用語としてエスペラントを採用し、英國諸學校に斯語の援助を求め、更に國際聯盟を促して、世界に同樣エス語敎授を推薦せしむべく決議すべし」といふ件に關する投票を提案する事になつた。昨年東京で大會が開かれたが一人もエスペランチストは居ないやうであつた。この大會に於て何の程度まで互に意見を交換し合ふことが出來たかは疑問である。ハバイ、大本などの宗敎がエスペラントを採用した事は誠に當を得たことであつた。國際的運動には是非エス語が必要である。ロータリーが今エス語採用を問題としてゐるのは寧ろ遲い位である。

内地報道

エス建 議案衆議院通過 請願貴族院で採擇

前月號報道の如く去る第五十六議會に提出した「國際補助語エスペラントヲ小中學校教科目ニ編入ノ件」及「日本エスペラント學會ニ對スル補助並奬勵ノ件」の二請願は衆議院にて採擇されたが貴族院でも採擇されたと右提出に御盡力下された貴族院議員高橋琢也氏より通知に接した。

猶竹下文隆氏提出の「エスペラントヲ小學校及中學校敎科目ニ編入ニ關スル建議案」及「財團法人日本エスペラント學會國庫補助ニ關スル建議案」の二建議案は去る3月25日の本會議にて無事可決された。この事は我々にとつて無限のよろこびであり又我エス運動にとつてこの上もなき大きな收獲である。この事に對して御盡力下された方々に厚く感謝の意を表明致します。併しこの請願及建議案に對して政府では大した調査を開始しない事と思ふから今後も我々は議會毎に請願提出に努力したいと思ふ。

土岐氏の快著「外遊心境」

昨年外遊の旅にでゝその間エスペラントを大いに利用されて各地の風光人情をきはめてこられた土岐善麿氏はその外遊記を今回改造社から出版された。同氏の外遊記「外遊心境」はありふれた外遊記とは選を異にしたものであり各國人の胸裡に深く入つたものでありその行文の流麗と觀察の精緻を以て光つてゐるがその卷末にはエスに關した記事のみを全部エス譯したものを附錄として添へてある。その譯文は松本清彦君の翻譯になるもので(その中の幾つかは既に本誌上に掲載したが)その譯文又原文に劣らぬ流麗無比のものである。とにかくかゝる書籍が出版された事は實によろこばしい事で又エス宣傳上うる所が極めて大であろう。色アート紙に澤山の寫眞入で印刷されたもので裝幀又優美、大さ21×17cm. 本文230頁エス譯文20頁、定價2圓50錢である。

東京

★學會主催四月會話會 4月20日午後7時暴風雨のため出席者は20名位であつた。お話をお願した上野孝男氏が御用のためお出でを願へなかつたので小坂氏の「鐵道車輛」の話をきいた。隨分 interesa な話でおそくまで時のふくるもしらず聞いてゐた。その後で會話の練習をして散會。

★ザメンホフ祭 東京エスペラント倶樂部主催で4月14日ザメンホフ祭を神田美土代町基督敎青年會館にて開催。芬蘭公使ラムステッド博士、アレキサンダー孃其他中村、丘、望月博士等の出席あり。出席者は70名の多數であつた。始め食事をなしつぎに paroladoj にうつり、ラムステッド公使、アレキサンダー孃、丘博士、丘博士令息、梶、佐々城、松本、三宅孃其他諸氏の話あり。西村鞠子、西村澄子兩孃の詩の暗誦あり。當日土岐善麿氏の好意により同氏の新著「文藝の話」(朝日常識講座の一篇でその中にエス語に關する記事ある事は前月號本欄で紹介した)を出席者に一册宛御寄贈下された事は愉快な事であつた。こゝに記して土岐氏に厚く感謝の意を表明したい

★エスクラピーダ・クルーボ例會 4月26日夜帝大山上御殿にて Eskulapida Klubo 主催にて新入生卒業生の歡送迎會を開催した。會するもの20名。千葉醫大助敎授鈴木正夫氏の同クラブの歷史についての話あり興味深くきかれた。その後で千葉醫大敎授古屋氏の「自然科學者としてのゲーテ」についてのお話があつた。このお話は實に興味津々たるものであつた。自己紹介をなし10時散會。

★クララ會 4月21日13時半より佐々城松榮氏宅に例會開會。Krestomatio を30分讀み、續いて出席會員の salutoj あり、其の間 Esperantaj kantoj の合唱、deklamo 等あり非常に愉快な集りであつた。16時半散會。

★慶應醫學部エス會 4月22日より毎日午後0時30分-1時西校舍第一講堂にて初等講習會を開く。敎材は小坂氏講習用書、西氏醫學エス文集で講師は望月敎授、草刈氏等。

★Argenta Kunsido 四月號に本會の anonco 出づるや斷然出席人數を増し今や着々帝都に於ける常設親睦會の實を擧げつゝある。殊に最近、大橋氏の意匠をこらせる壁畫(?)數葉が掲げられ之等は一々 Esp. の説明付きだ。例へば Delikate bongusta kiel amo——Fruktĵeleo と云つた工合に。又 Menuo も Esp. で presi され Du tasojn da kafo! と云へばちやんと珈琲二杯持つて來る樣な氣が利いた kelnerino も現はれ始めた。一週間の激務に疲れた體を其土曜日に此 Esperantujo に落付け Verda atmosfero に浸らんとするの士は來り給へ!(銀座明治製菓二階、毎週土曜午後二時より)

★學會主催遠足會　4月21日、日曜、小金井へ櫻見物。正午新宿發途中成蹊學園の同志を加へ總員二十三名。此日天氣晴朗なれども風強く櫻花は既に散つてゐたが假裝した醉漢の風景面白し。林中にて一同 Espero, Tagiĝo 等を唱ひ餘興に興ず。それより約一里成蹊學園まで歩き、成蹊エスペラント會諸君の御招待にて茶話會がその食堂にて開かれ一同の自己紹介、演說、成蹊校歌のエス譯合唱、城戸崎、伊藤氏の獨唱等あり愉快なる半日を過した。成蹊エスペラント會諸兄に厚く御禮申します。



Kunveno de Tobata Esp. Grupo okazigita por adiaŭi al Prof. Isobe.

★戸畑エス會の磯部教授送別會

後列左より、中西、村上、武田、林、中野、片山。前列、村田、中村、磯部、同夫人、令息令孃の諸氏。

大津　中大路氏が新しく文具店を開業されたので廿數名の同志が之の開店の準備やその他一切の世話をして「大津市上京町札之辻下ル」に中大路文具店として立派なものが出來あがり又こゝが大津エス會の事務所として同志が大いに利用する事になりました。大津へ来られる方はお訪れ下さい。尙大津エス會は大津商業エス會の新入生及卒業生の歡送迎會をひらきました。(寫眞參照)

小倉　四月十五日圖らず小坂狷二氏先般來の山陽線列車脫線事件解決の爲來倉さる。早速近邊の同志に通知を發す。同日19時より市內京町カフエーライオンにて同氏の歡迎會を催す。會するもの十二名。門司戸畑の同志も來會。小坂氏の興味ある御話にうつとりとききとれる。雜談は雜談を重ねて時の過ぎるを知らざる有樣、かくて22時閉會す。階級を問はざる職業の如何を問はず胸襟をひろげて語り得るは唯エスペラントのみなるを痛感した。最後に我々の願を入れて忙がしいにも拘らず御出席下さつた小坂氏に心から感謝す。

前橋　4月14日前橋商業學校移校記念展覽會に際し同校同志の製作に係る「希望塔」を出品し尙內外の同志より受けたる手紙、繪葉書其の他のエスペランターヂオ等を陳列す。(寫眞參照)。同日入場者約500名同志は各自の役目を有して居り又時間少き爲め滿足には出來なかつたがザメンホフ祭日を有意義にすごしたのは會心の至りであつた。又之を機會に同校同志は文通を希望して居る由宛名は下記へ。前橋商業學校內 鈴木豐三郎（前高エス研究會代表者）『群馬エス研究會報』

福岡　**戸畑市**　長らく北九州に於てエス語指導に携つてゐた戸畑明專教授磯部幸一氏は此度新設の九州醫學專門學校教授になられ久留米市に赴任せらるることとなつたので三月二十四日戸畑エスペランタ・ヘイモに於て送別の會が開かれ戸畑、八幡、門司、小倉の同志來會した。(寫眞參照)

★**築上郡**　山田村洞田寺玉水俊覺氏の盡力にて綠化運動今や女性に及び此度築上エスペラント會女子部を創立するに到つた。

臺北　四月十一日臺北高等學校に於てエスペラント小展覽會開催、學生のエス語常識涵養に資し續て甲斐教授指導の下に長期講習會開催の豫定。四月十五日より市內南門專賣局クラブ樓上に於て短期講習を杉本會長開講の筈。中央研究所中澤博士有名な

ローマヂストである。同氏は獨佛英語に堪能ながら今回の歐米出張に際し特に綠星旗及章を携行しエス語の威力を試さむと出發した。

高岡市 **高岡エスペラント會** では高岡新報社後援の下に4月10日午後六時半から櫻馬場水波佛教會館でエスペラント講演會を開催。講師は最近歐洲から歸朝した四高教授瀨川重禮氏の「歐洲に於ける國際語の旅行談」高岡高商教授小寺廉吉氏の「國粹主義と國際主義」及高商講師ベナブルス氏の「現今に於けるエスペラントの必要」等であつた。

東京學生エスペラント聯盟 第二回例會豫告

日時：五月十一日（土曜日）午後二時より
場所：帝大構內　山上御殿
會費：約四十錢（紀念撮影をなす）

振つて學生先輩諸兄の御出席を願ひます。



Post la Ekspozicio en Maebaŝi Komerca Lernejo
★前橋商業學校エスペラント會 前列左より、鰐淵、岸（群馬エス研究會）松本、關口、鈴木、糸田、高橋。後列左より藤田、鈴木、千川、兼松。



Kunveno de Oocu Esp. Grupo.
★大津エス會で大津商業の新入卒業の諸氏送迎會。前列、新入生、中列卒業生、後列、エス會員の諸氏。

親日ハンガリー人の嘆き

粟飯原　晉

31. ハンガリー人の嘆き

1928年の秋、Budapest 大學敎授 D-ro Vilmos Pröhle が、東京を訪れた。ハンガリーに於ける日本の名譽領事であり、日本文學研究者、日本語通、親日家として有名なプレーレ敎授が日本に來て先づ驚いたことは、豫想以上の英語萬能で、『自分が日本へ來て、まさか英語で話しをさせられやうとは!』と云つて居た。次に同氏が "Romaji" 誌に寄せた日本文を掲げる(原文ローマ字書き)。

『或日のこと、私は帝國ホテルを出て、日比谷公園の方へ散歩に出掛けました。すると一人の日本の人が、すぐ私の後から追掛けて來て "Are you an Englishman?" と英語でお尋れになりました。『いゝえ、私はイギリス人ではありません。ハンガリー人で御座居ます』と答へますと、"O, you can speak Japanese very well." とほめて頂きましたが、『いゝえ、私の日本語は、まずいです。暫くこちらで日本語を勉强いたす積りです。あなたのイギリス語の方がよつぽどお上手です。』と申しますと、其方は顔を眞赤にして、「さよなら」と逃げる樣に立去られました。私は散歩から歸つて、こんな腰折れを作りました。

イギリスの言葉を知らで行くまじき
　　こころを問はば日の本の國

どうぞ皆樣の御批評を願ひます。』

32. 運動家と言語問題

札幌の近郊にジルバースロープ、手稻山にユートピア・パラダイスといふ處があり、スキー小屋にはドイツ語のヒツテを用ひ。パラダイス・ヒツテなんかと呼んでゐる。斯樣な不見識な名前をつけ、『シーハイル』等とドイツ語で仲間同志の挨拶をする北海道のスキー仲間を叱正せられた北海道大學敎授永井一夫博士は、如何に學問の恩を受けたとて、斯樣にまで外國語に阿る必要は無いではないかと云つてゐられる。博士の論難を導火線として最近には時事新報が『運動の術語を日本語に改めたい』(Feb. 26, 28. 1929) と主張した。これと同時に國際オリンピック大會或は年々世界の各地で益々盛に催される各種の國際競技會の際の合圖語其他用語の協定を主張し度い。1928年オランダで開かれた國際オリンピック大會の出發合圖語は、英、獨、佛の三ケ國語を用ゐ、その何れを使用するかは出發合圖員の屬する國によつて決した。卽ち英國人が出發合圖員の場合は、英語で「オン・ユーア・マーク」「レデー」、フランス人の場合は「ア・ボ・マルク」「プレー」、ドイツ人の場合は「アウス・デイ・プレーツエ」「フエルチツヒ」となるわけである。萬國オリンピツク大會では勿論二國間の國際競技に於ても、言葉の問題は非常に大きな心理的影響を競技參加者に與へるであらう。此の公用語問題の解決の速かならんことを望む。

33. 人造時代

中歐チエコスロヴアキアの戯曲作家チヤペツクは『人造人間』といふ戯曲を書いた。此の劇は東京の築地小劇場でも演出せられたし、エス語譯も出版されてゐる。科學の發達が其の極に達し、『人間の創造』が遂に人間の手に依つて完成されたことを書いたものである。

所が多く天才の言が常に一大豫言であつた如く、このチヤペツクの構想も決して痴人の夢ではなかつた。米國で製作された人造人間は電話もかければ、掃除もする、命令に應じて機械を止めたり動かしたりする、又戸の開閉もするといふ。英國のバークンヘツド卿の『百年後の世界』といふ論文には『化學者は研究室で赤坊の製造に成功し……總ての食料品は人造品になる』とある。

人造人間は未來の話としても、既に實用の時代に入つたものに、人造絹絲、人造香料、人造寶石、人造貴金屬、人造牛脂、人造樟腦、人造石油、人造アスフアルト、人造象牙、人造樹脂、人造石、人造氷、人造皮革、人造眞珠、人造羊毛、人造肉等があり、最近の外電はエヂソン翁の人造ゴム製法發見を傳へてゐる。

試みに銀座街頭に立つて見給へ。人造絹絲の靴下、ネクタイ、金紗お召、人造の香水、人造皮の手提げ、人造眞珠の指輪、人造ラツコの皮、セルロイド製の鼈甲櫛、人造染料の美しさと、特に人造時代の現出である。人造語エスペラントの躍進的發展を期待するのは此の人造時代を措いては他にあるまい。

エスペラント初等講義

〔第五講〕

La Restoracio 〔料理店〕

restoracio 料理店	tranĉ'il'o ナイフ	rost'aĵ'o 燒肉
kaf'ejo カフエ	suker'uj'o 砂糖入れ	viando 肉
kelnero / serv'isto 給仕	krem'uj'o クリーム入れ	legomo 野菜
	buter'uj'o バタ入れ	salato サラダ
manĝ'o'kart'o / menuo 獻立表	buŝ'tuko ナフキン	mustardo 芥子
	dent'pur'ig'ilo 楊子	vino 葡萄酒
manĝ'il'o 食器	supo スープ	brando ブランデイ
kulero 匙	fiŝ(aĵ)o 魚肉	pudingo プツヂング
forko フォーク	kotleto カツレツ	kuko ケーキ
telero 皿	bifstiko ビフテキ	

1. Ĉiutage ĉe la tagmezo mi vizitas la restoracion nomatan "Verda Stelo" en Kanda, kie mi ofte renkontas esperantistojn, ĉar la mastro de l' restoracio kaj la kelnerinoj tre bone parolas Esperanton.

毎日正午私は神田の「ベルダステーロ」と呼ぶ料理店へゆきます。そこでは時々私はエスペランチストに出會ひます、それはそこの主人や給仕女がとても上手にエスペラントを話すからなのです。

〔說明〕 ★ **ĉiu'tage**=en ĉiu tago. ★ **ĉe la tag'mezo** 正午に。五月一日午後五時にといふ時は je la 5-a horo posttagmeze en la unua tago de Majo とよぶのが普通です。卽ち時刻には je といふ前置詞をつけ日の前には en といふ前置詞をつけ月は de をつけます。「正午に」といふきまつた時刻をさす時は ĉe をつかひます。(je も使へますが)。朝は en la mateno です。午前六時は je la 6-a horo matene (又は antaŭtagmeze) 午後六時は je la 6-a horo vespere (又は posttagmeze) です。午前午後は略字として (a. t. m.) (p. t. m.) 又は (a. m.) (p. m.) 等とします。★ **restoracio** は日本で云へば主として洋食店にあたる樣になりますが日本の料理屋だつて restoracio とよぶより外ありません。★ **viziti** は大變便利な語です。日本語の「訪問する」意味許りに飜譯すると變ですがその viziti する場所本來の目的にそふ樣な vizito につかふので芝居をみにゆく事は viziti teatron でありカフエへ飲食をとりにゆくことは viziti kafejon です。他の用事でゆく時は iri al をつかふのみです。★ **nom'at'a'n** となづけられたるは略してもよろしい。Mi abonas la gazeton nomatan "La Esperantisto." ★ **kelner'in'o** kelnero は給仕卽ち料理店のボーイです。kelnerino はそれで女ボーイといつた譯です。最近東京の restoracio で「女ボーイさん入用」の札がよく眼につきます。ボーイは英語の boy(=knabo) からできたのだが今では全く給仕の意味にのみ使用される樣になつたので「女ボーイ」とよんでふしぎでなくなつたのです。★ **parolas Esperanton** は parolas Esperante 又は parolas en Esperanto とよびます。

2. Kiam mi eniras en la restoracion kaj sidas ĉe tablo, kelnerino demandas min, kiujn mi volas preni.

私が料理店へ入つて食卓につくと給仕女が私が何をたべるかを尋れます。

〔説明〕★en ～n は ～の外に居てその中へ入つた事。eniras en la ĉambron は「部屋の中へ」入つた事。laboras en la ĉambro「部屋の中で働いてゐる事」。★sidi ĉe tablo は食卓につく al'tabl'iĝ'i ともいふ。sidi apud tablo は「食卓の傍に坐つた」といふ意味で食事をしたゝめるためとは考へられませんが ĉe の時はその tablo の目的にそふ行爲をなす場合に使用する樣です。(勿論 tablo は食卓とばかり限りませんが)。apud の時はたゞその場所を明示するためにつかふのである。

3. Sur ĉiu tablo oni vidas menuon, laŭ kiu mi mendas diversajn manĝaĵojn, trinkaĵojn kaj aliajn.

各の卓子の上には献立表がありま す。それによつて私は食べ物やのみ物や其他を注文します。

〔説明〕★tablo は主に食卓をさします。ですから宴會などでお客さん達に「食事(食卓)の用意ができました」と云ふ事を Sinjoroj, tablo estas jam preta! と云ふのが普通です。書齋の机などは skrib'o'tablo と云ひます。★menuo は mon$\hat{g}$'o'kart'o とも云ひます。★laŭ kiu の kiu は menuo をうける關係代名詞です。

4. Post momentoj, la kelnerino alportas al mi manĝilarojn: kulerojn, forkojn, tranĉilojn. Poste ŝi alportas manĝaĵojn, kiujn mi mendis.

まもなく共給仕女は匙やフォークやナイフ等の食器を運んできます。それから私の注文した食物を運んできます。

5. Mi ofte mendas legoman supon, fiŝon, bifstekon, kotleton, salaton, pudingon, kaj teon.

私は時々野菜スープ、魚、ビフテキ、カツレツ、サラダ、プヂング、紅茶を注文します。

〔説明〕★post momentoj=post minutoj=tuj など大體同じ樣な意味に使ひます。★al'porti もちはこぶ。Bennemann はエス獨辭典で hol' といふ語根を提案してゐますがこれはドイツ語の holen をとつたのでつまり「とりにいつてもつてくる」事です。卽ち holi=aliri kaj preni kaj alporti となるのださうです。日本語の「とつて來い」にちかいと思ひますが alportu といつたゞけでその命ぜられた人がそのもつてゆくべき物のそばに居なければいつも「とりにいつてもつてくる」ことになるもの故別に holu といはずともわかる。それ故こんな新語根は不要だと思ふ。

6. Kiam mi trovas esperantistojn en la restoracio, mi mendas glasetojn da vino kaj kun ili trinkas por niaj sanoj kaj por la prosperiĝo de nia sankta movado.

料理屋でエスペランチストをみた時は葡萄酒を注文して我々の健康と我が聖なる運動の繁榮を祝して乾杯をします。

〔説明〕★trinki por ies sano 健康を祝して乾杯する事です。乾杯するといふ動詞は tosti といふ。tosti は以前は toasti ともいつたが tosti が公用語となつて toasti を使ふ人がなくなりました。

エスペラント中等講義

【Lingvo ĉie Komprenata】

Longe ne troviĝis konsentantoj. Fine ebriulo, ekssuboficiro, akceptis la proponon de l' ksendzo. Sed li havis nur arĝentan horloĝon, kiun li estis ricevinta pro sia paflerteco, kaj li proponis taksi ĝin je dudek-kvin rublojn. La ksendzo pro sciemo konsentis konkuri kun la suboficiro. Je la horo fiksita, en la loĝejon de la ksendzo kolektiĝis la tuta urba eminentularo, por vidi senpagan prezentadon. La oficiro alvenis en gaja humoro. La ksendzo sidiĝis sur seĝon; kontraŭ si li sidigis la soldaton; ĉirkaŭ ili sidiĝis la kunveninta publiko. La senpaga prezentado komenciĝis.

【譯】 久しく之に應ずる者が無かつた。とうとう酒飲みの退職下士官が牧師の申出を受け容れた。併し彼は射擊の上手な爲に曾て貰つた銀時計を持つてゐる許りだつた。そして彼はその時計を二十五ルーブルに見積つて貰ふ樣に申出たのであつた。牧師は好奇心にそゝられて、その下士官と競爭する事に同意した。定刻には、牧師の住家へ此無料の見世物を見ようと云ふ町の高位高官が悉く集つた。下士官は一杯機嫌でやつて來た。牧師は椅子に腰を下し自分の向ひ合せに兵士を坐らせた。彼等の周圍には、集つて來た公衆が座を占めてゐた。無料の上演が始つた。

【註】 Konsent'anto 同意する者。 ebri'ulo 酩酊者。eks'sub'oficiro 退職下士官。 arĝenta 銀の。horloĝo 時計、こゝでは勿論 poŝ-horloĝo (懷中時計)の事。estis ricev'inta 已に前から(賞與として)貰つてゐた。paf'lerteco 射擊上手。taksi 評價する、見積る。sci'(vol)'emo 好奇心。konkuri 競ふ。horo fiks'ita 定められた時間。 loĝ'ejo 住家。 kolekt'iĝi 集る。eminent'ul'aro 高官連。sen'paga 拂ひなしの、無料の。prezent'ado 上演。en gaja humoro 陽氣な氣分で。kontraŭ si 自分と向ひ合せに。

La ksendzo levis la manon supren, montrante per fingro la ĉielon. La soldato rigardis la ksendzon kaj montris per unu mano la teron. "Bone", diris la ksendzo. Poste la ksendzo montris per unu fingro la soldaton. La soldato per du fingroj montris la ksendzon. "Bone", ree diris la ksendzo. Fine la ksendzo etendis flanken siajn brakojn. La soldato rigardadis la ksendzon—kaj ekbatis lin. "Bone! Bone!" ekkriis la ksendzo, kaj oni malfacile lin fortiris de l' soldato. Al la soldato estis redonita lia horloĝo, kaj li ricevis ankoraŭ 25 r."

【譯】 牧師は天を指さし乍ら手を上の方へ上げた。兵士は牧師を眺めた、そして片手で地面を指し示した。「よろしい」と牧師が言つた。それから牧師は一本の指で兵士を指さした。兵士は二本の指で牧師を指さした。牧師は又「よろしい」と云つた。最後に牧師は兩腕を左右に擴げた。兵士はジツト牧師を眺めてゐたが、思ひ出した樣に牧師を毆り始めた。牧師は「參つた、參つた」と叫聲をあげた、そこで彼を兵士から引離すのは仲々困難であつた。時計は兵士の手に返され、彼は尙二十五ルーブルを受けとつた。

【註】 levi supren 上の方へとあげる。re'e =re'foje = de'nove 再び。 etendi 擴げる。flank'e'n 側へ。oni mal'facile lin for'tiris. 人々は彼を引離すのに困難した。類例:– Oni tre *malfacile* el'lernas aliajn lingvojn ol nian lingvon Esperanton. エス語以外の言語を習得するのは仲々の難事だ。Al la soldato …. = La horloĝo de la soldato estis redonita al li.

Ni, ne komprenante, rigardis la rakontanton; li daŭrigis:

"Nu, fripono estas la ksendzo," diris la soldato. Kiam la ksendzo montris supren: "Mi pendigos vin", li diris; kaj mi al li montris per fingro malsupren: "Mi vin en la teron enigos." Poste li montris min per unu fingro: "Mi vian okulon elŝiros"; mi montris per du fingroj: "Mi la du viajn elprenos." Poste li flanken etendis la brakojn: "Mi vin krucumos", li diris. "Nu, mi pensis: ĉar vi estas tiel malbonkora, mi batados vin; estu perdita mia horloĝo!" Sed mi ĝuste tiel devis agi. Mi ĉion estis kompreninta, kion la ksendzo signifis.

【譯】 私達は何の事かも分らずに話し手を見つめてゐた。彼は話を續けて、—そこで兵士が言ふに、「如何にもあの牧師は曲者だ」。牧師が上を指し示した時には、「俺はお前を絞首臺に懸けてやらう」と言つたんだ。だから俺は、「貴樣を地中に葬つてやらう」と云ふわけで、下の方を指さしてやつた。それから奴が一本の指で俺を指さして、「お前の片眼を引抜いてやらう」と言ひやがつたから、俺は二本の指で奴をさして「俺は貴樣の兩の眼の玉を引つこ拔いてやらう」と云つた。それから奴は腕を擴げて「お前を磔にしてやらう」と言つた。「そこで、俺は考へた、貴樣がそんな思ひ遣りのないことをぬかすなら、俺はあくまで貴樣を毆りつけてやらう。俺の時計なんかは如何うにでもなりやがれだ!」 然し俺には正しくさうより他に仕樣がなかつたんだ。俺には牧師の奴の腹の中がすつかり解つてゐたんだから。

【註】 Ni=konstantinopolo へ來た連中。rakont'anto 話し手、卽ち露西亞の修道士。fripono 惡漢。pend'igi 懸ける、絞殺す。en la teron en'igos=en'ter'igos 地面の中へ入れるだらう、葬る。el'ŝiri 引拔く。la du viajn =du viajn okulojn. el'preni 取り出す。kurc'umi 磔にする。estu perdita mia horloĝo! 私の時計よ失はれてあれ! ĉion, kion la ksendzo signifis. 牧師が意味したことを何もかも。

Kaj la ksendzo diris la jenon: —Besto estas la soldato, sed saĝa. Mi al li diris mimike: "Sinjoro, Dio kreis la ĉielon", kaj li al mi respondis: "Kaj la teron". Mi diris: "Dio kreis vin", kaj li diris montrante min per du fingroj: "kaj vin, nin ambaŭ". Mi plie diris: "Sinjoro, Jesuo estis krucumita", kaj li kanajlo, ekbatis min kaj diris: "Kaj vipita! kaj vipita!!"

【譯】 すると牧師は次の樣な事を言つた—あの兵士は利巧だが四足だ。俺は彼に手眞似で「お前さん、神は天を創造し給ふたのだ。」と言つた、すると彼は答へて言ふに「そして地をも」と。俺は「神がお前を創造し給ふた。」と言つた。すると彼は俺を二本の指でさし示し乍ら「そして貴方を、我々二人を」と言つた。俺が更に續けて「お前さん、キリストは十字架にかけられ給ふた。」と言ふと、奴はいきなり俺を擲つて「そして鞭打たれたんだ、鞭打たれたんだ。」と言つたんだ。

【註】 jen'o 次の如きこと。kaj (Dio kreis) la teron. kaj (Dio kreis) vin, nin ambaŭ. pli'e 更に。kruc'umi 磔にする。kanajlo 惡漢。vip'ita 鞭打たれたる。

Ni ĉiuj ridegis kaj dankis la rakontinton pro la ekzemplo, kiu kontraŭdiras la aserton ke la gesto kaj mimiklingvo estas lingvo ĉie komprenata. (*K. Boguŝevic*)

【譯】 吾々は悉くドッと笑つた、そして身振りと物眞似と云ふ言語が流通自在な言語であると云ふ主張に反對する例證を擧げて吳れた事を、吾々は話し手に感謝した。

【註】 ekzemplo 例、模範。kontraŭdiri 反對する。aserto 斷言、主張。

文法講話

〔其　五〕

小坂狷二

5. 助　辭

名詞、形容詞、副詞、動詞として常に語尾を付けて用ひる語根を一括して本辭と云ふのに對して、語尾なくして用ひられるものを一括『助辭』と名づけることにしたが、助辭は partikuloj の名の示す如く謂はば片小語の總稱で、此等の語は結局文中で本辭を助けて文意を明確ならしめる役目をなすこと文法上の語尾と一般である。極めて primitiva esprimo としては本辭だけ並べても意味の推察はつく Patrin(o)—don(is)—libr(o)—infan(o) でも感じのいゝ人ならわかつてくれよう。然し *La* patrino donis libron *al la* infano と云へば判然明確である。助辭としての役目柄はこれを煎じつめればその普通に用ひられる場合は無限ではない、有限少數である。卽ち助辭の數は本辭とちがつて有限小數であり、日常反覆用ひらるべきものであるから、一々語尾を以て分類區別する必要はない。覺えてしまへばよいわけである。且つ又助辭の分類なるものは本辭とちがつて本質的のものでもなく、又徹底的のものでもない。代名詞、代形容詞、副詞的助辭(代副詞)、前置詞、接續詞、間投詞(感動詞)などと分類はしてゐるが、これは文法屋が全く勝手に便宜的又は傳統的に分類してゐるので、中にはどれへ組み入れたらよいかわからぬものもあり、又二三兼務をやる助辭もある。例へば ambaŭ は數詞であると云ふ人もあれば、副詞的助辭となす人もある。Apenaŭ は副詞的助辭の意にも用ひられゝば、又接續詞としても用ひられ、ĝis は前置詞としても、接續詞としても用ひられる。間投詞に至つては全く副詞的助辭との區別がつかぬ Jes! adiaŭ, … など。玆に於て助辭は語尾の『區別が必要でない』と云ふよりはむしろ『區別の語尾を作つてはならぬ』こととなる。そして覺えて活用する上に於て助辭はその數の少きを以てよしとなすわけで、 super, supre にならつて René de Saussure の君が dekster, dekstre; sinster, sinstre … などはこれ如何になど proponi したのは沙汰の極みである。『有限少數』な助辭で間に合はぬ『場合』は『組み合せ』がいくらでも出來るから一向差支ない: dekstre de; interne de; en la daŭro de; en la nomo de (popolo?); tiel longe kiel; antaŭ ol; post kiam; ne parolante jam pri, … など Sufiĉe! Dio mia!

助辭も語尾をつければ本辭に出世する。丁度或本辭から他の本辭が轉來するのと同樣である。 Patr' は名詞的語根であるから patra は轉來の形容詞であり、Plori から出た ploro は轉來の名詞である。 Bela は本來の形容詞で、bele は轉來の副詞であり、 nepre (ロシヤ語の nepremenno から採つた副詞) は本來の副詞で、 nepra は轉來の形容詞である。Plu は plu ne legu などと用ひられる副詞的『助辭』であるが Li parolis plue (=daŭre) となれば堂々たる本辭同格の副詞である。然らば本辭が語尾を落して助辭に左遷せられることがあるか？無きにしもあらずで本來の動詞が擬音から來てゐる場合、その音を表はす間投詞(擬音)として用ひられることが多い。

Paf, paf! kaj la birdoj ĉiuj forflugis

ズドン、ズドン (pafoj の音)！ 鳥はみんなにげてしまつた。

Kvak, kvak! kvakis la ranoj.

ガアガアと蛙がないた。

なほ次の如きも變格助辭である。

Halt'! kiu iras. —— Hamleto, p. 1.

止まれ！ 誰ぢや。

Mi tute difektis mian laboron dank' al via malhelpo.

君が邪魔をしたおかげで仕事はめちやくちやだ。

此等は Halto (estu ordonata)! danko の o が elizii されたものである。 dank' al は丁度一體となつて一前置詞 (『…のおかげで』)' となつた觀がある。これは

(Estu) beno al Zamenhof!

有りがたやザメンホフ！

(Estu) danko al Dio!

有り難い有り難い！

などの意から出た句で、 且つ mano en mano, brak'(o) en brako, kapo malsupren など云ふ簡潔な句が kun la mano en la mano, kun la brako en la brako, kun la kapo (turnita) malsupren などの長たらしい句に代用されて一體『副詞(句)』として用ひられるエスペラントの elasteco から見れば當然のことである。

(Estu) dank' al Dio (kaj) mi sukcesis.

おかけ樣でうまくゆきました。

傳統的便宜主義の通俗分類によつて助辭を分類すれば次の通り。(*) 印は他の種に共用されるもの、又は分類が二叉的のもの。

[I] 名詞的助辭(代名詞):

(a) 人稱代名詞: mi, ni, vi, ci, li, ŝi, ĝi, ili, oni, si の十語。

(b) 相關詞中の -o 類 (tio, kio 等五語)

[II] 形容詞的助辭(代形容詞):

相關詞中の -a (tia, kia 等), -u (tiu, kiu 等)の十語。

[III] 副詞的助辭(代副詞):

Ajn, almenaŭ, ambaŭ (*數詞), ankaŭ, ankoraŭ, apenaŭ (*接續詞), baldaŭ, ĉi, ĉirkaŭ (*前置詞), ĉu (*接), do (*接), eĉ, des (pli), for (*間投詞), hieraŭ, hodiaŭ, ja, jam, jen, jes (*間), ĵus, kvazaŭ (*接), mem, morgaŭ, ne (*間), nek (*接), nun, nur, plej, pli, plu, preskaŭ, tamen, tre, tro, tuj.

相關詞中の -al, -el, -am, -om, -e 類の二十五語。

〔註〕 bis (*間): Oficiala ではないが La Rabistoj, p. 612 Z 博士が用ひてゐる。

[IV] 冠詞的助辭

(a) 冠詞: la

(b) 數詞: unu, du, tri, kvar, kvin, ses, sep, ok, naŭ, dek, cent, mil の十二語。

(c) 相關詞中の -es 類五語。

(d) ambaŭ (*副詞的助辭)

[V] 前置詞: al, anstataŭ, antaŭ, apud, ĉe, ĉirkaŭ (*副), da, de, dum (*接), ekster, el, en, ĝis (*接), inter, je, kontraŭ, krom, kun, laŭ, malgraŭ, per, po, por, post, preter, pri, pro, sen, sub, super, sur, tra, trans.

[VI] 接續詞: apenaŭ (*副), ĉar, ĉu (*副), do (*副), ja (*副), ju (pli), kaj, ke, kvazaŭ (*副), nek (*副), ol, se, sed.

關係詞として用ひられる疑問相關詞中の kiam, kie, kiel, kiom (何れも*副)。

[VII] 間投詞: adiaŭ (*副), ha, he, ho, fi, ve, nu, hura.

〔註〕 間投詞は他のものと類を異にするので擬音など數へれば無數に出來る。上記八語は皆 oficialaj vortoj のみを掲げた。(he と fi は Universala Vortaro の第一回補遺に、hura は第三回補遺に、他は Fund. の Universala Vortaro に在り)。間投詞に就てはまた次號に書く。

〔註〕 (1) 名詞的助辭は全く名詞扱で目的語になれば目的格の語尾 -n をつける: min, tion. 但し意味の上から複數がないから語尾 j はつけることはない。

Tio estas libro. Ĝi estas interesa.

それは(と指す詞、單複にかゝわらず)本です。面白い本です。

Tio estas libroj. Ili estas interesaj.

それは本です。面白い本です。

(2) 形容的助辭は全く形容詞扱ひ、依て形容する名詞に應じて語尾 -n, j をとる。

相關詞 -u 類は次に來る名詞が略された場合には日本語としては名詞的の譯をつけるがよい。

Kiu (homo) li estas?

あの人は誰。

Tiu (libro) estas interesa, sed tiu ĉi ne.

そちらの方は面白いが此方はそうでない。

(3) 冠詞的助辭は形容詞の如く名詞につくが自身は -n, -j の添附語尾をとらぬ。la libron, kies libroj, dek librojn など。

(4) エスペラントでは副詞(數量の意の)が輕く名詞の代りに用ひられるが、副詞的助辭も亦然り。但し何れの場合も名詞でないから目的語となつても -n はつけない。

Kiom da libroj vi aĉetis.

比較: Mi aĉetis kelke 又は kelkon da libroj.

Tro da kuiristoj kaĉon difektas.

あまり大勢料理人が居ると反つてオヂヤをまづくする(船頭多くして舟山に登るに當る諺)。

Trioble kvar estas dekdu.

三四の十二。(玆に kvar は名詞でないからその形容語は形容詞でなく副詞形を用ひる)。

(5) 代名詞、代形容詞、代副詞あつて代動詞なきは是如何に…と來るかも知れぬが、成程英語には代動詞がある: Did he come? Yes, he did の did は came の代りで正に代動詞 (pro-verbo?)であるが, エスペラントではそう云ふ用法はない。動詞をくりかへすか又は全然略す。

Ĉu li venis?——Jes, li venis.

Ĉu vi volas iri?——Jes, mi volas.

次の例の fari は英語式の代動詞ではなくて tion に eliri の意が含れてゐるのである。

La maljuna sinjoro intencis eliri tra la pordo kaj faris tion.——Andersen, Fabeloj II, p. 83.

即ち faris tion=faris la eliron.

(6) miliono, miliardo や nulo 等は數詞(即ち助辭)ではなくて本辭であるとするのが至當である。

質　疑　應　答

★エス語に於ける主文と從屬文との動詞の時に就て（京都府清水氏）　同質問（東京市保坂氏）

〔答〕英語では sequence of tense と云つて主文の動詞が過去なら從屬文の動詞は盲目的に、嫌應なしに過去の『形』にする。エスペラントではそのようなことのないことは前號本欄中澤氏の假定法に關する質疑の應答に述べた通りである。

Li diris: „Mi iros.“

Li diris, ke li iros.

比較：英語なら He said: „I will go“. He said that he would go. ここに英語で、would は will の過去卽ち『過去に於ける未來の形』と云ふ珍妙な動詞形式で、これは主文が過去なら從屬文は何でもかんでも過去にすると云ふ英語の習慣法から出たことである日本語ではエスペラントと全く同じく『彼は行こうと云つてゐる（現在）』『彼は行こうと云つた（過去）』『彼は行こうと云ふよ（未來）』など從屬文の『行こう』は變らない。

Li diras, ke li iros.

Li diris, ke li iros.

Li diros, ke li iros.

例：Mi demandis, ĉu li lernas Esperanton.

Mi demandas, ĉu li lernas Esperanton.

Mi demandos, ĉu li lernas Esperanton.

日本語でも『私は彼がエスペラントをやつて居る（其當時現行）かどうか尋ねた、尋ねて居る處だ、尋ねてみよう』と從屬文はかわらぬ。これは正に當然すぎる位當然で、英語は不當然、不自然な形式劃一である。比較

Mi demandis lin: „Ĉu vi lernas Esperanton?“＝Mi demandis, ĉu li lernis Esperanton.

私は彼にエスペラントを學んだ（過去）かと尋ねた（過去）。

Mi demandis lin: „Ĉu vi lernos Esperanton?“＝Mi demandis, ĉu li lernos Esperanton.

私は彼はエスペラントを學ぶつもり（未來）かと尋ねた。

全く日本語と同じ。英語だと形式劃一からまことにやゝこしいことになる：I asked if he had lernt…, I asked if he would learn…

★Por teni la korpon sana kaj forta … 英語になほすと to keep the body healthy and strong… でせうがエス語では不定法があつても前置詞を要するのですか（東京市 保坂氏）

〔答〕不定法の前には必ずしも前置詞はいりません。

Mi iros gliti.

氷辷りをやりに行こう。

但し目的を特に表示して『（何々）するために、（わざわざ何々）しに』の意を附け加へたい時には不定法だけでは足りない。かゝる場合には por をつける。卽ち por は英語の in order to …に當る。

Mi venis ĉi tien por vin saluti.

貴下に御あいさつ申すために（わざわざとの目的で）まかり出ました。

なほ不定法の前に普通附け得るのは por の他に anstataŭ 及び antaŭ ol である。

Bone esploru antaŭ ol lin riproĉi.

彼をくさす前によく調べてかゝれ（よく調べてから非難せよ）。

此等の場合その意味上から見れば por, anstataŭ 等は前置詞と云ふよりはむしろ接續詞としての用法で、次の云ひ方を疊んで省略した形である。

Mi venis ĉi tien, por ke mi vin salutu.

Bone esploru antaŭ ol vi lin riproĉos.

そしてこれが疊んで不定法となり得るのは丁度次の疑問詞附の句が同樣に疊まれて接續用法をなすのと同斷である。

Mi montros al vi, kiel vi devas rajdi＝Mi montros al vi, kiel rajdi.

馬に乘り方を見せ（敎へ）てやろう。

Mi ne sciis, kion mi faru＝Mi ne sciis, kion fari.

僕はどうしてよいか（何をすべきか）わからなかつた。

★書籍の代價に RM とあるは何字の略ですか（新潟縣 Ooiŝi-K 氏）

〔答〕獨逸現在の貨幣單位 Rentenmark で今我が五十三錢位に當ります（日本金が下落してゐるので）。これは昔の Marko が大戰の結果無價値になつたので、金準備の代りに土地收入（rento）を保證として作つた金で、rentomarko（＝Rentenmark）、戰前の marko と同値にもりかへし得たわけです。從つて物價も高くなり在留日本人などは、昔の marko

の下落時代とは打つてかわり樂ではありません。

★Heroldo 誌に trafiki や ekde と云ふ語があり。何の意ですか（同氏）

〔答〕 trafiko は『交通、運輸』、trafiki は從つて『交通する』意です。interkomunikiĝo と同義です。まだ oficiala vorto として Akademio（エスペラント學士院）によつて公認されてゐませんが、英語 traffic, 佛語 tarfic など internacia です故 Plena Gramatiko（文法十六ケ條）の第15條により用ひられ得る次第です。Ekde は原文を見れば判定し兼れますが ek+de で『…から始めて, …以來』の意に用ひたものと思ひますが、もしそれなら甚だ以て感心の出來ぬ用法で單に de 又は depost で用は足ります。

★Fund. Krestmatio, p. 100, l. 16: Dio vidas, ke li estas bona Katoliko: …ĉu li ne revas alporti ĉiujn siajn estontajn riĉecojn al ankoraŭ pli granda celo—liberigo de la tombo de Dio? の譯を （京都府 石田氏）

〔答〕 神様は彼が善良なカトリック信者であることはおわかりなのだ…彼が空想に描いてゐるのはその未來の全富をもつともつと大きな目的——神の墳墓の地（卽ち聖地パレスチンを指す）を解放するために持つてこようと云ふのではないか。

★同書 p. 101, l. 9: la gereĝoj, okupitaj je milito, forveturas Kordovon, kaj la konsiliĝoj de la komisio ĉesas … Li sekvas post la kortego.（同氏）

〔答〕 王及び皇后は戰爭のため御用でコルドーヴに御移りになり、委員會の相談も中止となつた… 彼は宮廷(kort'ego)のあとを追つて(post) ついて行つた （コルドーヴへ行つた）。

★同書 p. 101, l. 13: Denove li komencas eldonadon de kartoj (=landkartoj), kaj jaro post jaro, kvar malfacilajn jarojn, iel trabatas sin, … atendante, kiel almozon, (la tempon) kiam al la reĝaj moŝtoj plaĉos rememori pri la malriĉa Genuano.（同氏）

〔答〕 またもや彼は地圖の發行を始めたのである、一年とたち二年とたち (jaro post jaro), 克苦四年の間彼(コルムブス)はどうやらこうやらしのぎをつけて行つた (tra'batas sin)、兩陛下が此の貧困なゲヌア人（彼コルムブス自身を指す)のことを思ひ出される(時機の來る）のを、施し物を待つように待つてゐたのである。

★同書 p. 101, 下から l. 2: Ili aperas antaŭ la reĝo kaj defendas lian planon, kaj … la reĝo promesas denove trarigardi lian proponon —post la fino de la milito kun la Maŭroj. Tio ĉi estas super ĉiuj homaj fortoj! Malespero lin atakas: oni povas pensi, ke tiuj ĉi sinjoroj esperas, ke li neniam mortos.（同氏）

〔答〕 此等の人々は王の御前に出て彼の計畫を辯護してくれ…王はも一度彼の建議に眼を通さうと約束された——但しそれはマウロ人との戰爭がすんでから後にと云ふことだ。それや人力の及ばぬことだ！彼は落膽失望する。何のことはないまるで此等のお方だちは彼が永久死なぬものだと心得て居られるのだ（彼は旣に老年故、マウロとの戰爭がすむまで命があるかどうかわからぬ）。

Oni povas pensi, ke … 此の方だちは彼が決して死なぬと云ふ期待をもつてゐるのだと考へても然るべし（そう期待してゐるのだとしか思へないではないか）。

Tio staras super mia povo.=Mi ne povas fari tion.

それやとても私の手におへません。

★同書 p. 102, l. 13: Ĉu efektive lia patrujo montriĝos tiel blinda, ĉu efektive ĝi permesos, ke alia nacio efektivigu la grandan planon de lia amiko.（同氏）

〔答〕 ほんとに彼の（コルムブスの友ペレズ）祖國はそんなに盲目（コルムブスのえらい計畫がわからぬ）なのであろうか、おめおめと他國民をして我が友(コルムブスを指す)の大計畫を遂行せしめるのであろうか。

montr'iĝi（…であることが）あらはれてくる、…になつてくる、見ると…であることがわかる。

Dum mia eksterlanda vojaĝo Esperanto montriĝis al mi mirinda helpilo.

海外旅行中エスペラントがすてきに助けになつた（旅行してみると不思議な助けであることがわかった）。

Permesi（何々するを）許す。

Ĉu vi permesas, ke ili vin moku?

人に笑はれて指をくわえて居るのか。

〔御注意〕 譯や單語の質問は必ず出所の書名頁數行數を明記すること。

自由作文添削欄

編輯部

PROSPEKTO

Originale verkita de MaF.

Dormemo! Malviglemo[1]! .... tio estas la voĉo aŭdata ĉie pri la Esperant-movado en Hokuriku provinco.

(Ne)[2] estas en la provinco ↓ neniu fervora Esperantisto. Eble, ĉiuj Esperantistoj en la provinco ne malpli entuziasmaj estas ol ali(aj)[3] provincaj samideanoj.

Do, kial Esperant-movado en Hokuriku estas tiel malvigla?

Laŭ mia opinio, tio estas (tute) kaŭzita *sendube* de l' ĝisnuna maltaŭga[4] organizmetodo esperantista.

Estas ne bezone diri ke ne (dirante) nur (pri) esperant-movado, *sed* ĉiu movado sukcesas per nur ↓ la forto de multaj homoj unuigitaj. Kaj krom tio, Esperanto *devas* aparten(endas) *i* al popolo, sed neniam al malmultaj specialaj homoj. Esperanto (ne) devas (neniam) resti (kiel supera) ludilo de intelektulo*j*[6], (kaj) *sed ĝi* devas (esti) *servi* (la bono de) *al* popolamaso.

Ĉu ne diris nia Majstro prave,.... "Ne forgesu, ke Esperanto estas ne sole simpla lingvo, kiun ĉiu el ni uzas nur por siaj propraj bezonoj, sed ke ĝi estas grava socia problemo."

Sinturne[7], ni (pripensu) *rigardu* nian ĝisnunan movadon. Ĉu tio ne estis ludilo de homoj difinitaj[8]? Ĉu ni penadis (vere) *efektive* disvastigi nian ideon en popolamason? Bedaŭrinde, ne!

(La kunvenoj de ni, restis nur societorgano de la esperantistoj.) *Ni aranĝadis la kunvenojn nur por interamikiĝo aŭ amuziĝo de esperantistoj).* Kiu el ni kun fervoro de batalanto iris en la straton?

Esperanto estis nur la trezoro (kaŝata)[9] *kaŝita* (el) *de* popolamaso.

Kelke da samideanoj klopodis (vere) propagandi esperanton, tamen ili baldaŭ malkuraĝiĝis, ĉar aliaj ne helpis ilin. Kiu iris kun brilanta espero en straton, tiu iam estis rigardata kiel sintrudemulo, kaj eĉ kiel frenezulo. Ho! kia bedaŭrinda, hontinda afero!

(Sed)[10] disbati tian hontindan staton estas la plej grava devo de la batalanto*j*. Batali neniam estas babili en salono!

Ĉe ĉi tio, ni nun intencas antaŭenpaŝi en pacan bataladon.

Tamen tia batalado neniel estas ebla sen organizita forto.

Organizo estas forto!

Ĝis nun ekzistis kaj (ankaŭ estas ekzistanta[11]) *ankoraŭ nun ekzistas* la Hokuriku-Esperant(ist)a-Federacio. Kompreneble, ni ne diras, ke ĉi tiu estas nebezona. Ĝia neceseco estas tre grava.

Sed tamen, kialon ni ne scias, ekzistas nenia(n) organizaĵo(n), kiu unuigas la esperantisto*jn* en la gubernio.

Tio ĉi estas rezultanta strangan fenomenon, (kiel) *ke* esperantistoj (kiu loĝas) *loĝantaj* en (reciproke) proksimaj lokoj ne interkomunikas *reciproke* inter si. Kaj tia fakto (necesece) *konsekvence* kondukas *al* la malvigle-(mon)*eco* (de) la movado*n* en la gubernio.

Konsiderante ĉi tiun cirkonstanco*n*, ni nun proponas organizi "Tojama-gubernian Esperantistan Ligon" al la tre estimataj gesamideanoj *en la gubernio*.

Havu bonecon konsenti nin, por la prospero de Esperanto.

....Aldonita regularo estas nur la aĵo por via informo.

Nu, prosperigu Esperanton!

Kun samideana saluto.

La iniciatoroj.

〔注意及おことわり〕( )は取る。イタリックは挿入する。內容の批評はさしひかへます。↓⌒ は位置の移動。紙數の都合で aldonita regularo は割愛しました。

〔解說〕 1. -em- は本來動詞的語根につく接尾語で形容詞的語根につける場合は ig 又は iĝ で先づ動詞になほしてそれに em をつけるのです。しかしその ig 又は iĝ を省き得る場合があり形容詞的又は名詞的語根をすぐ動詞に用ひ得る場合があるから形容詞的語根にすぐ em をつけるのは (Zamenhof の用例もあるので) 絕對にいけないとはいへませんが濫用はさくべきだと思ひます。でこの場合は -ec- を用ひたらどうでせうか。

2. neniam があるのに ne を用ふれば打消しがないのと同樣になります。

3. aliaj provincaj esperantistoj では他の地方の…といふ意になりません。他の、地方のエスペランチストといふ事になります。日本語にしても印をつければわからなくなるだから特に注意を要します。

4. sentaŭga 又は netaŭga とした方がよいと思ひます。

5. -end- は……されればならぬ……の意で他動詞につく接尾語ですからこの場合は用ひられません。devas aparteni とすべきです。

6. inteligentuloj を用ひた方がよいと思ひます。

7. sinturni は自分をむける又は向くの意で後を向くの意はありません。これは returne 又は returnen とすべきです。

8. 限られたの意ならば limigitaj がいゝと思ひます。

9. kaŝi はかくすといふ動作です。かくされてゐるのは其動作がなされたあとの狀態ですだから kaŝita とすべきです。

10. この場合には sed は意味をよわめるものです。

11. estas ...anta と特に必要な場合の外は直接法で代用する方がよいと初步の教科書にかいてあります。

其の他、 teksto はタイプライターによる presaĵo で preseraro ではないかと思はれるものも幾つもありましたがなほしてないので作者の eraro として取扱ひました。

originale verkita とことわつてあるにかゝはらず多分に tradukaĵo の匂ひがします。日本語では書いては見なかつたにしても先づ日本語で考へて後 esperanto に考へなほして書いたのではないでせうか。なれぬうちは無理もないがなるべく esperanto だけで考へる習慣を作つて下さい。それには會話の練習が最も有効です。

(附記) 和文エス譯は今度は休みます。未發表の二回分の答案をお送り下さい。自由作文もふるつてお送り下さい。御希望により紙上には名を出しません。

新　刊　紹　介

大　島　義　夫

★**AELITA** de Alekseo Tolstoj, el rusa lingvo trad. de E. Pill. pĝ. 199, 14×20 cm. Eld.: Heroldo de Esperanto, Köln, Germ.

"Princo Serebrianj" や "Morto de Danton" で Esp. 界にも知られているロシアの大衆作家 A. Tolstoj の romano で filmo となつて非常に好評を博したものだそうであり著者自身も卷頭に最近ロシアで最も多く青年男女に愛讀されたものの一だと自ら太鼓を叩いている。

愛妻を失つてその煩悶の遣り場を火星訪問旅行に見出した科學者と突飛好きな冒險狂である一兵卒とが或日ペテルブルグを爆發推進機を利用した空中を走る潜水艇みたいなものに乘つて火星へ出發し、別に空氣との摩擦で燃えてしまいもせず無事 Marso に到着する。

この火星は至つて人間的であつて、支配階級と勞働階級との對立が激烈を極めている點などは地球以上で、Ufa の Metropolis とよく似ている。支配者は空中ボートと稱する上下進退自由自在の理想的空中交通手段を握り空間を無視した透視器を利用し地上に享樂を擅にしている一方生產者階級は地下の大機械の一齒車となつて陰慘な生活を續けている。

科學者 Losj と兵卒 Gusev とは火星の支配者の娘 Aelita の下に閉ぢ込められ、奇妙な火星語を習う。その中に prudento のかたまりの樣な Aelita が Losj によつて愛に目覺めさせられる。その一方火星に於ける勞資の階級鬪爭はますます激甚の度を加え、支配者と勞働者の代表者との間の談判不調が告げられて、すばらしい革命戰が展開される。

Aelita の隙を覗つて透視器をひそかに見ていた冒險王の Gusev は之を知つて、いたゝまれず早速空中ボートに打乘つて laborista kvartalo にかけつける。武器を持たない laboristoj を勵まして先づ arsenalo を襲擊して武裝の上、支配者側の大軍と空中に戰鬪を初める。

紫の閃光を放つて殺人光線の丸になつたような bombo が飛ぶ。トンボの樣な aerboato が Gusev の投げる bombo に當つて景氣よく落つこちる。

が戰は一度 laboristaro に有利に展開はしたけれど支配者側の飽くなき攻擊にやゝたぢたぢする。こゝで Gusev は挺身して奮鬪を續け遂に敵彈に當つて倒れる。

これを知つた Hosj は Aelita の下を去つて Gusev を抱えて地下の labirinto に逃げ込み、無事 Gusev を助け出す。Losj は Aelita の愛の約束の聞き終えぬ中、地球人を追跡する支配者に Aelita は奪はれ、自分は傷けられ Gusev に助けられて乘つて來た飛行艇にのり込んで火星を後にして地球え向つて飛行する。

無事アメリカはミシガン湖のほとりに墜落その後 Losj は研究に、Gusev は火星勞働階級えの援兵を募集する。一日 radio-stacio が火星から受信したといつて Losj を呼んで aŭskultilo を耳にさせると、Aelita の聲 "Ho, kie, kie vi estas, la amo" で幕。

と言つた樣な至つて奇拔な、科學的空想よりは romaneco の多分にある面白い讀物である。

★**ILUSTRITA BIBLIOTEKO**, dua serio (n-roj 6–10): La Maro pĝ. 172, 14×20 cm. eld. Heroldo de Esp. Köln, Germ.

ヘロルドの叢書。四つに分册され、すべて海洋に關する物語。Gerstäcker の La ŝipĉarpentisto, G. Fock の Navigado estas necesa, D. P. Boatman の Kaprico, A. Daudet の Agonio de la Sémillante. Teo Jung の Gudrum, Cunningham の La hantataj ŝipoj, Russel の Ŝuldpedelo sur la maro.

挿繪つきであつさりした手頃な讀物集として推稱する。Jung のものなどは Nibelungen と共にドイツ中古の史詩として有名なものであるだけ、かなり興味をひくと思う。

★**La Meinicke-reakcio per malklariĝo kaj la Murata-precipitreakcio ĉe lepruloj. Studoj pri la precipitkurboj ĉe sifilis-lepro-kaj kacinomseroj. La Wassermann kaj Murata-sifilisreakcio ĉe tuberkulozo. La Wassermann-kaj Murata-sifilisreakcio ĉe lepruloj.** de M. Murata kaj T. Tamija, 13×24 cm. eld. La Iji-Ŝimbun, Tokio.

篤學の同志村田正太、田宮貞亮二氏による癩病、結核患者に於けるワッセルマン反應と村田黴毒反應に關する研究。

Leteroj en kaj pri Esperanto

Tiuj ĉi leteroj estas privataj. Sed ĉar la enhavo estas ankaŭ por la legantoj de LA REVUO ORIENTA mi petas la permeson al la sendintoj la leteroj ilin publikigi. —Naokazu Kawasaki kaj J. Okamoto.

BERLIN-CHARLOTTENBURG,

La 27 de novembro 1928.

Al Sinjoro Naokazu Kawasaki

Wü./Schw. Sumiyosi-Kôen Nisitorii

Osaka Japanujo

Tre estimata sinjoro,

Akceptu mian sinceran dankon pro via letero de la 10a de novembro 1928.

Apartan gramatikon mi ne intencas publikigi. Multajn gramatikajn detalojn pritraktus jam la EV mem; la vortteorion detale priparolas la enkonduka volumo, ankoraŭ ne presita.

Sinoptikan poliglotan verkon pri la precizaj naciaj signifoj de pseŭdo-internaciaj vortoj mi ne konas. Mi konstatas tiujn signifojn precipe laŭ unulingvaj enciklopedietoj de la respektivaj lingvoj(ekz-e por la franca de Larousse, por la angla de Blackie k. a., por la hispana de Almany), laŭ literaturaĵoj verkitaj en tiuj lingvoj kaj per buŝa konsulto de eksterlandanoj ĉi tie vivantaj. Seslingva [GFAIREsp] vortaro ordita laŭ la ideoj (signifoj) kaj tial semantologie utila estas: Heckers Wortschatz in 6 Sprachen. Verlag(=eldonejo) Alexander Schmidt, Bonn (Germanujo); ricevebla per la Esperantolibrejo Fr. Ellersiek G. m. b. H., Berlin SW 61, Wilmsstr. 5.

Monografion pri la teorio de la leksikologio mi ne konas. Pri la praktiko leksikografa informas publikigitaj priskriboj pri la genezo de kelkaj ampleksaj vortaroj, ekz-e la "Schlussbemerkung der Verlagsbuchhandlung" sur la paĝoj III (=1635)-VIII de la granda franca-germana vortaro de Sachs-Villatte. Pri metodologio de ordado (tute ĝenerale) ekzistas apartaj verkoj. Al la semantiko ĉiu pli granda lingvistika verko dediĉas ĉapitron. Se vi sufiĉe scias la germanan lingvon, mi tre rekomendus al vi la jenan sistematikan verkon pri vortkreado: Theodor Steche, Neue Wege zum reinen Deutsch, Ferdinand Hirt in Breslau, 1925. Ampleksas 346 paĝojn. Prezo: 12 germanaj markoj. Ĝi estas ricevebla ankaŭ de Hirt & Sohn, Leipzig. Sindone via

Eugen Wüster

(5) WÜSTER Akademiano でもLingva-Komitatano でもないが彼の"Enciklopedia Vortaro Esperanto-Germana"は全部完成のあかつきは Esperanto 辭典としては最大なものであろう。其他"Zamenhof-Radikaro","Die Verhältniswörter des Esperanto", "Maŝinfaka Esper. nto-Vortaro Prielementa" などがある。

Parizo, 22-an de marto 1928.

Kara Kolego,

Ĉi kune mi sendas al vi karton de nacia delegito por Japanujo, kaj mi korege dankas vin pro la servoj, kiujn vi jam faris al nia Asocio kaj pro via intenco daŭrigi vian tiel viglan kunlaboradon.

Sur tiu kampo nun via lando donas rimarkindan ekzemplon. Plej taŭga propagando estas, kiel faras viaj samnaciuloj, uzi Esperanton en la internaciaj kongresoj; pli ol multaj paroladoj, tiaj faktoj impresas la indiferentulojn de la sciencaj kaj teknikaj rondoj.

Korege via

Rollet de l' Isle

35 Rue Du Sommerard Paris.

P. S. Bonvolu sciigi al S° Rousseau la profesion de la novaj membroj; tiu sciigo estas tre utila por eventualaj interrilatoj inter niaj membroj, kaj estas menciata en la listo de la membroj.

S° Rousseau, laŭ via peto, sendos al la novaj membroj la Bultenon n° 9 kune kun la Bulteno n° 10, je la fino de ĉi-tiu monato.

Mi, kun granda intereso, ricevas vian *Revuon Orientan* kaj legas la esperante redektitajn artikolojn. Ĉu vi ne povas—kiel mi jam diris al vi, mi kredas—aldoni kelkajn liniojn resumantajn la japanlingve redaktitajn artikolojn? Tio multe pli interesigus la nejapanajn legantojn, kaj estus ekzemplo de aplikado de tiu metodo, kiun ni rekomendas al la nacilingvaj teknikaj gazetoj.

(6) ROLLET DE L'ISLE. Lingva Komitatano であり且 Akademio の專門術語部の部長である。又 Internacia Scienca Asocio Esperantista の Ĝenerala Sekretario である。Provo de Marista Terminaro, Konsilaro por la Farado de la Sciencaj kaj Teknikaj Vortoj 等の著あり。

PRILINGVA RUBRIKO

Kolekto de eltiroj represitaj el diversaj esp. gazetoj

Ĉu esceptoj en Esperanto?

1) **La ne ŝanĝiĝas laŭ kazo kaj nombro, kiel la aliaj apud-vortoj, finiĝantaj je –a.**

Escepto 1): La estas la difina artikolo; je –a finiĝas ĉiu adjektivo. Artikolo kaj adjektivo ne apartenas al unu sama vortklaso; artikolo ne estas atributa vorto same kiel adjektivo. Certe, la artikolo „la" estas uzata kiel apud-vorto ĉe substantivo same kiel adjektivo. Sed ne ekzistas vortklaso de „apud-vortoj en Esperanto, finiĝantaj je –a"; ekzistas vortklaso „artikolo" kaj vortklaso „adjektivo." Ĉar ne ekzistas vortklaso „apud-vortoj je –a", ne ekzistas regulo por tiaj vortoj; sekve ne povas ekzisti „escepto" de tia regulo!

La regulo en Esperanto por la vortklaso „artikolo" estas: „La difina artikolo estas ‚la' por ĉiuj seksoj kaj kazoj, por singularo kaj pluralo. Ne-difina artikolo ne ekzistas." La regulo en Esperanto por la vortklaso „artikolo" estas: „La adjektivo finiĝas ĉiam je –a. Deklinacio kiel ĉe substantivo." Jen du reguloj memstaraj, ne unu regulo kun escepto!

2) **Ne ĉiuj adverboj finiĝas je –e.** **Escepto 2):** La regulo en Esperanto estas jena: „La adverbo finiĝas je –e. Komparacio kiel ĉe adjektivo." El la teksto evidentiĝas, ke Zamenhof celas per ĉi tiu regulo nur adverbon, kiu estas derivita de adjektivo; li ne intencis diri, ke *ĉiu* adverbo finiĝas je –e; se li estus volinta, diri ĉi tion, li estus aldoninta la vorton „ĉiu" aŭ „ĉiam", kiel li faris rilate al la finaĵoj de substantivo kaj adjektivo. Ne ekzistas regulo, ke ĉiu adverbo en Esperanto finiĝas je –e, sekve ne povas ekzisti escepto.

3) **La finaĵo –aŭ, kiu evidente estis destinita, fariĝi speco de prepozicia finaĵo, estas uzata tre sensisteme.**

Escepto 3): La sistemo, laŭ kiu Zamenhof aplikis la silabon -aŭ en fino de vorto, konsistas en tio ke li intencis starigi varieconen vortfinoj, kie ĉi tio povis esti farata. La silabo -aŭ ja ne estas „finaĵo" en la sama senco, laŭ kiu estu konsiderataj la finaĵoj –a, –o, –e ktp.; ĝi apartenas ĉiam al la radiko de l' Esperanta vorto. La lingva sistemo, nomata Esperanto, neniel rajtigas paroli pri finaĵo –aŭ, sed nur pri vortfino je –aŭ. Ĉu Zamenhof iam eble havis la intencon, uzi nur prepoziciojn finiĝantajn je –aŭ, estas nepre indiferente por la nun ekzistana Esperanto, kiu ne havas regulon por finaĵo –aŭ, sekve ne povas ekzisti escepto.

4) **La genitivo je –s (kies) estas aplikita nur tre malofte kaj formas escepton konsidere al la ordinara maniero, esprimi la genitivon.**

Escepto 4): Ne ekzistas en Esperanto regulo, ke kelkfoje la genitivo estu formata pere de finaĵo –s. Ne ekzistas finaĵo –s, sed nur vortfino je –s. La formoj „ies, ties, kies, ĉies, nenies" estas kromaj vortoj apud „de iu, de tiu, de kiu, de ĉiu, de neniu," kiuj lastaj esprimoj ne estas forigitaj! La vortoj „kies ktp." estus esceptoj, se la formoj „de kiu ktp." estus malĝustaj laŭ iu lingva regulo; ĉar tia regulo ne ekzistas, ne povas ekzisti escepto.

5) **Ĉe ‚multe da' aŭ ‚kelke da' la akuzativo ne povas esti esprimata.**

Escepto 5): Ni konsideru la frazon: „Mi bezonas nuntempe multe da mono, por aĉeti kelke da libroj." Objektoj estas „multe da mono" kaj „kelke da libroj." Tia objekto estu laŭ la reguloj en Esperanto en akuzativo. La vortoj „multe" kaj „kelke" ne povas fariĝi akuzativoj, sekve — Jespersen diras: escepto! Ne ekzistas regulo en Esperanto, ke iu adverbo povas esti uzata en akuzativo, sekve ne povas ekzisti escepto, se la adverboj „multe" kaj „kelke" ne povas fariĝi akuzativoj! Sed ekzistas la regulo, ke rekta komplemento de verbo (rekta objekto) estu en akuzativo, sekve — mi diras: la frazo ne taŭgas; ĝia stilo ne estas sufiĉe korekta; elektu formon, kiu ebligas akuzativon. La frazo tekstu; „Mi bezonas multan monon, por aĉeti kelkajn librojn."—aŭ (sed tio estas malpli bona!): ···multon da mono···kelkon da libroj. El malbonstila frazo oni ne povas konkludi pri boneco aŭ malboneco de Esperanto. （以下次號）

ALVOKO AL INĜENIEROJ-ESPERANTISTOJ PRI INTERNACIA TEKNIKA KONGRESO

Vi eble scias, ke internacia teknika kongreso okazos en Tokio sub la patronado de L. M. Princo Ĉiĉibu kaj la honora prezidanteco de la ĉefministro Barono Tanaka (kaj la agada prezid. D-ro Barono Furuiĉi) dum du semajnoj de la 29-a de Okt., 1929.

Laŭ la programo estos 23 fakaj kunsidoj kaj antaŭ-, dum-, kaj postkongresaj ekskursoj al diversaj lokoj.

Estas informite, ke jam estas 350 aliĝintoj el Eŭropo kaj Ameriko. Kvankam ni ne scias kiom da Esperantistoj sin trovas inter la aniĝintoj kaj pluaj aniĝontoj, ni opinias, ke venas al ni la plej bona okazo ne preterlasebla por vigligi nian movadon.

Ni do nun turnas nin al vi, samideanoj-inĝenieroj, petante, ke se vi estas partoprenontoj, bonvolu subskribi kun ni en ĉisubaj proponoj, kiujn ni intencas prezenti al la kongreso, kaj se sin trovas partoprenontoj inter viaj konatuloj, volu konsili al ili ankaŭ subskribi, eĉ se ili ne estas Esperantistoj.

Jen la provizora teksto de la proponoj, kiujn revizi, se necesas, ni estas pretaj laŭ viaj konsiloj:

Proponoj al la Internacia Teknika Kongreso. Tokio, Okt.-Nov., 1929.

Konsiderante la rapidan progreson de la internaciaj rilatoj pro la lastatempa disvolviĝo de interkomunikado.

Konsiderante la mirindan facilecon de la internacia lingvo Esperanto precipe ĝian neŭtralecon plej grava.

La subskribintoj proponas:

1) Ke la oficiala lingvo de la internacia teknika kongreso estu de la sekvonta fojo Esperanto, kaj ĉiu partoprenanto estu tiel egale rajtigita kiel aliaj uzi sian propran lingvon laŭvole, kondiĉe, ke oni nepre aldonu tradukon en Esperanto.

2) Ke por akceli praktikan uzadon de Esperanto inter inĝenieroj tutmondaj, kiel la plej efika rimedo por interŝanĝi sciojn kaj por interamikiĝi inter si estu nomata agada komitato por komisii jenajn taskojn:

a) Kompili sub aŭspicoj de la Esperantista Akademio en Parizo vortaron de inĝeniera terminaro.

b) Eldoni organan gazeton kaj inĝenierajn librojn en Esperanto.

Rilate al la libroj estas rekomendinde, ni opinias, ke oni traduku antaŭ ĉio inĝenierajn poŝlibrojn, kiuj pritraktas plej vaste pri diversaj branĉoj de la inĝeniera scienco, ekz. "Das Ingenieurs Taschenbuch" de "Hütte", ktp..

Estimataj Samideanoj! Bonvolu subteni nin en la projekto kaj komuniki al ni la nomon, naciecon kaj specialajon, ekz. meĥanikisto, ĥemiisto, arkitekto, ktp. de la subtenantoj, por ke ni povu prezenti la proponojn kiel eble plej frue al la komitato koncernanta.

Samideane Viaj K. Takahaŝi, Del. U. E. A
Civila inĝ.
T. Minoda, Civila inĝ.
Ĉe Tecudô Kjôkai (Fervoja Asocio) Jûraku-ĉo, Tokio.

SKIZOJ DE INDNEZAJ POPOLOJ.

Prof. E. Asai, Fremdlingva Kolegio, Osaka

LINGVA PROMENADO

Se oni faros liston de Indoneziaj lingvistoj, oni trovos, ke plejmulte de ili apartenas al la holanda nacieco — Snouck-Hurgronje, Adriani, Jonker, Kern, Brandes, van der Tunk k. t. p.. Tamen tiu, kiu metis la indonezian komparan lingvosciencon en sciencan sistemon, se ne kompletan, estas svisa filologo nomata D-ro Renward Brandstetter, kiu skribis dekojn da monografojn sur tiu ĉi branĉo de lingvoscienco, kaj lerte montras al ni indonezian pralingvon. Angla traduko de liaj ĉefaj verkoj titolita "An Introduction to Indonesian Linguistics. London 1916" estas facile havebla kaj servas al studentoj de la indonezia lingvoscienco kiel la plej bona *enkondukanto.*

Nun ni komparu kelkajn vortojn en diversaj indoneziaj lingvoj. Eĉ malmultaj ekzemploj estas sufiĉaj por doni al legantoj impreson de lingva simileco de indoneziaj popoloj.

1. SUNO. En indoneziaj lingvoj "suno" aperas ĝenerale kiel *raŭ, laŭ, daŭ.* En indoneziaj lingvoj tri konsonantoj *r, l, d* ofte interŝanĝiĝas. Kaj ofte antaŭ tiu *raŭ, laŭ* aŭ *daŭ* silabo *a* aŭ *an* estas metata. Jen Ekzemploj: Tagalog (Phillipines) *araŭ.* Botel-Tobago (insuleto apud Formoso) *araŭ.* Gayo (Sumatra) *lo* — en Gayo diftongo *aŭ* fariĝas *o*, komparu, Malaja *rantaŭ* "marbordo" > Gayo *ranto.* Carisen (Formoso) *adao.* Dayak (Borneo) *andaŭ.* Malagasy (Madagascar) *andru.* Paiwan (Formoso) *kadao* — en Paiwan dialekto *k* estas metata antaŭ komenca *u*, ekzemple, Ibanag (Phillipines) *ulu* "kapo" > Paiŭan *kuro.*

Por la vorto "suno" troviĝas alia formo *ari* aŭ *wari*, kies *r* diferencas en sia valoro de *r* enhavata en *raŭ*, ĉar la unua povas ŝanĝiĝi en *g, h,* kaj aliaj, kaj la lasta en *l, d* kaj aliaj. Indoneziaj lingvistoj, do, konjektas, ke en originala indonezia (kies mallongigo IN) pralingvo ekzistis du specoj de *r*: denta *r*, kiu ŝanĝiĝas en *l, d* (nomata RLD-Leĝo) kaj uvulara *r*, kiu ŝanĝiĝas en *g, h* (nomata RGH-Leĝo). Por bone kompreni IN fonetikajn fenomenojn estas necese memori ĉi tiujn du sonleĝojn. Nun mi klarigas kiel la *ari-wari* formo sin montras en diversaj IN lingvoj. Toba (Sumatra) *ari.* Malaja *hari*—malaja lingvo metas *h* antaŭ komenca a, ekzemple, Toba *ati* "koro" > Mal. *hati.* Bali (apud Java) *ahi.* Vonun (Formoso) *war.* Tajal (Formoso) *wagi.*

IN popoloj ofte aldonas *mata* "okulo" por esprimi "la sunon": Malaja *mata hari* "tagokulo"; Toba *mata ni ari* "okulo de tago".

2. LUNO. Mal. (mallongigo de Malaja) *bulan*. Mlg. (mallongigo de Malagasy) *wulana*. Java *wulan*. Malaja *b* fariĝas *w* en Mlg. kaj Java, ekzemple, Mal. *batu* "ŝtono" > Mlg. Java *watu*. Estas notinde ke Mlg. vortoj finiĝas per vokaloj, kaj ankaŭ ke vorto, kiu finiĝas per iu konsonanto en aliaj lingvoj, ricevas helpa sono *a* al la finiĝo—p. e. originala IN *inum* "trinki" > Mlg. *inuna*. Ibanag *bulan*. Magindanao (Philippines) *ulan*. Formosaj dialektoj: Pujuma *ruran*, Pepohwan *buran*, Ami *bulad*, Cuihwan *fural*, Vonun *boan*. IN *b* fariĝas *f* en Cui-hwan; alia ekzemplo —IN *batu* > Cui *fatu* (tiu ĉi *f* ŝajnas esti bilabiala aŭ dulipa, ĉar ĝi estas transskribita *fwatu* en raporto de Bullock 1874-5). Meza *l* malaperas en Vonun, komparu, IN *walu* "ok" > Vonun *wao*. Estas rimarkinda fenomeno, ke en Formosaj lingvoj finaj *l, n, t,* kaj *d* interŝanĝiĝas. Unu vilaĝo de la suda tajala tribo elparolas *kajal* por "ĉielo", sed najbara vilaĝo de la sama tribo elparolas *kajan*; *tajal*—tribnomo signifanta *homon* —en unu vilaĝo, sed *tajan* en alia vilaĝo. Rilate al tiu ĉi *tajan* "homo" mi volas citi el Japana Geologia Enciklopedio de Joŝida-Togo: la landonomo de Formoso estas nun skribata ĥinlitere 臺灣 tai-wan, sed antaŭe ĝi estis skribata 大員 aŭ 大宛 elparolo tai-jen, kaj tiuj ĉi estas ĥinlitera transskribo de vorto *tajan* "homo" de la lingvo de unu suda civilizita aborigena tribo. Tiu konjekto estas prava. La nomo de la originala opinianto ne estas donita, sed kredeble la mortinta fervora formosologiisto Ino estus la unua opinianto. Komprenemble *tajal* de la norda Tajal tribo rilatas al *tajan* de iu suda tribo, kaj ambaŭ rilatus al komuna IN *tau* "homo".

Indoneziaj popoloj ofte uzas metaforon por esprimi "suno" kaj "luno". "Luma", "Varmega", "Brulanta", "Oro", por la Suno, kaj "Brilanta", "Arĝenta", "Ŝipo", "Remisto" por la Luno.

3. PATRO. Preskaŭ ĉiuj filipinaj dialektoj esprimas per *ama*. Mongondon (Celebes) *ama*, Bolongan (Borneo) *tama*, Java *ama* aŭ *rama*. Gayo (Sumatra) *ama*, Mlg. *zama*, "patro, onklo", Masaret *ama*. Formosaj dialektoj: *ama*, *tama*.

ra, *ta* de *rata*, *tama* estas originale artikloj. Mlg. *zama* < *jama* < i+ama; *i* estas ankaŭ artikolo. En IN lingvoj ekzistas artikoloj: *i*, *a*, *la*, p. e., Tiruray (Phillipines) *fantad* "tero" *i fantad* "la tero", Gayo *anak bujan a* "knabo granda la".

4. PATRINO. Filipinaj dialektoj: *ina*, Mlg. *reni* < ra+ina, Tarakan (Borneo) *ina*, Simalur *ajah*, Formosaj dialektoj: *ina*, *tina*.

(*daŭrigota*.)

EN LA ŜIPO SUR "LA DONAU"

de Toki-Zenmaro trad. de jap. Kijohiko Macumoto.

Alveninta ĉe la bordo de "la Donau," mi trovis min staranta kontraŭ la kota fluo de la rivero, kiu larĝe kaj malvarme etendiĝas antaŭ miaj okuloj.

Ĝisrande enakvigita, ligite staras ĉe la bordo vaporŝipo, en kies internon mi ekiris laŭlonge de provizora ponteto. Mi ekpensis al mi, transirante malsupren la ponton, ke mi kvazaŭ malleviĝus ĝis la fundo de la rivero; kaj samtempe el miaj piedpintoj trakuris sento dezerte soleca. En tiu sama momento ekatakis mian orelon basa voĉo nek germane, nek france, nek angle, sed en iu al mi tute fremda lingvo. Surprizita mi eklevis mian kapon al tiu, kiu min alparolis kaj tiam lia voĉo ricevis pli da mordanta tono. Lia malbela eksteraĵo, portanta grasmakulitan laborveston donis plej bonan pruvon de lia ŝiplaboristeco, sed tamen lia gesto minacanta per hororiĉaj fingroj neniom helpis al mi interkompreniĝon.

Posedante bileton por la ŝipo, mi perfekte sentis min ĉe mi kaj trankvile elprenis el interna poŝo duonfalditan bileton kaj ĝin montris, rapide turnante ĝin en la mano, tiel kiel oni dorlotas infanon per ventmuelileto. La viro ekgrimacis per sia tuta vizaĝo nerazita kaj malpurega kaj etendante kontraŭ mi la brakojn, skuegis minace siajn ŝultrojn.

"Diablo prenu la azenon, se ĝi ne volas kompreni!" tiel mi insulte murmuretis en mi kaj ekiris sur la ferdekon. Jen li ankoraŭ obstine postsekvis min kaj mi nun komencis senti kelkan timon je li. Subite mi ekturnis min kontraŭ li kaj ekkriegis en japana lingvo: "Kion vi ja volas?" Mia voĉo trasonis ridinde akre tra la malseka vento en aŭtuno super la rivero. En tiu momento, mi ekaŭdis voĉon klare al mi kompreneblan: "KIO OKAZIS AL VI, SINJORO?" Tio estis en ESPERANTO. Estis ja tute ne atendita afero, ke mi renkontis samideanon en ĉi-tia loko, kvankam mi kutimis porti sur la brusto insigneton de verda stelo, ĉiam esperante, ke mi hazarde renkontus ie samideanojn. Supozeble la ĝentila

---

〔ドナウ〔ダニューブ〕河の船上にて〕

【註】 al'ven'i 到着する。 mi trovis min staranta 私は……に立つてゐる私を見出した。kota fluo 濁流。 etend'iĝi ひろがつてゐる、のびてゐる。 ĝis'rande 縁まで。en'akv'ita 沈んだ。lig'ite 結びつけられて。laŭ'longe de に沿うて。 provizora pont'eto 假橋。trans'iri la ponton 橋を渡る。 mal'lev'iĝ'i 沈む、下りる。fundo 底。 pied'pinto 足の爪先。 dezerte 砂漠の様に人影なく寂寥なる事。 basa voĉo 低い聲。 surpriz'ita 驚いて。al'paroli 話しかく。 mord'anta 嚙みつく様な。 ekster'aĵo 外觀。gras'makul'ita 油じみた。 gesto 身振り。 minac'anta 威嚇的な。 har'o'riĉa 多毛の。

samideano, ekrimarkinte verdas stelon sur la maldekstra kolumo de mia surtuto, tuj volis savi min el tiu mia 'grava situacio.'

" Dankon, sinjoro. Mi nur ne komprenas, kion tiu viro de mi postulaĉas." —mi respondis al mia nova konato. Li tuj ekturnis sin al la viro, kiu alproksimiĝis al mi kun treniĝanta paŝo. Tuj kiam li interŝanĝis kun la la viro kelkajn vortojn, ili reciproke ekridegis abrupte.

Mi komprenis laŭ la klarigo de tiu samideano, ke la viro petis de mi cigaredon. Bagatelaĵo! Mi nur vane maltrankviliĝis pro tia bagatelaĵo, se ne pro 'danĝera situacio.' Mi tuj malfermis por li cigaredujon kaj ĝin antaŭtenis. La viro eligis sian langon kaj ekprenis kun ĝojoplena mieno unu cigaredon el la ujo kaj unu alian enmetis en la poŝon de sia grasmakulita surtuto. Mi ankaŭ poste eklernis, ke la lingvo en kiu parolaĉis la viro estis la hungara, terure malbonigita per ĵargonoj. Rilate al la samideano, mi sciiĝis, ke li estante naskita rumano kaj laboristo en Vieno, estis vundita ĉe la karpeo, kaj ke li nun estas survoje al sia hejmlando. Efektive li portis bandaĝon, kiu tamen estis tre malpurigita. " Plezure, plezure! Mi absolute ne sonĝis, ke mi vidos en ĉi-tia loko japanan samideanon." Dum li diris ĉi tiujn vortojn perfekte ravita de mirinda renkontiĝo, unu alia samideano ankaŭ subite enŝovis sin kun salutvorto en nian interparolon: " Bonan matenon, karaj samideanoj!" Estas vere tre strange, ke mi aŭdu denove nian lingvon internacian en tiu sama loko, en tiu sama tempo! Paroli en nia lingvo okaze de kongresoj aŭ de esperantistaj kunvenoj estas tre nature. Tio tamen okazas nur en certaj tempoj kaj lokoj limigitaj. Aŭskultu, karaj legantoj! Ni ja ludis triope, ĉi tie sur la ferdeko, kvazaŭ rolojn en propaganda teatraĵo por Esperanto. Ĉu tio ne estis vera *miraklo de la dudeka jarcento* en Eŭropo, se ne en la mondo?

La rumano estis naskita en Brassö kaj nomata Robert Adolf Fanta kaj la alia samideano, estante civitano de Budapesto, nomiĝis Mauro Bihali.

Prezentu al vi tian scenon ĉe angulo sur la ferdeko, kie babilas tre intime kvazaŭ deinfanaj amikoj tri esperantistoj, el kiuj ĉiu diferencas per sia nacio, sed tamen havas lingvon egale nemulte uzatan en la mondo!

Mi malsuprenvenis antaŭ la salonon al la butiketo, kie mi aĉetis kelke da pomoj kaj ilin dividis inter ni. Mordmanĝante la pomojn, la du ka-

---

dorloti あまやかす。**vent'muel'ilo** 風車の製粉臼。**grimaci** しかめ面する。**ferdeko** 甲板。**post'sekvi** ついてくる。**ĉi-tia** こんな。**hazarde** 偶然的に。**supoz'ebl'e** 多分。**kol'um'o** カラー、襟。**surtuto** オーバー。**tren'iĝ'anta** ひきずる。**abrupte** 急に。**klar'igo** 説明。**cigaredo** 紙卷烟草。葉卷は **cigaro.** **bagatel'aĵo** 下らぬ事。**danĝera situacio** 危險狀態。**ĵargono** 俗語。**karpeo** 手頸。**sur'voje** 途中。**hejm'lando** 鄕國。**bandaĝo** 繃帶。**civit'ano** 市民。**sceno** 光景。**mal'supre'n'veni** 下りてくる。**butik'eto** 小店。**efiko** 効果。**vegetarismo** 菜食主義。**aflikt'iĝo** 困難。**domaĝo** 損失。**super'flui** 上をこえる。**land'karto** 地圖。**monotona** 單調な。**sugestia**

maradoj komencis prediki min pri la efiko de vegetarismo, ĉar ili ambaŭ estis fervoraj vegetaranoj sed baldaŭ ili ekŝanĝis sian temon al la post-Militaj afliktiĝoj inter popoloj kaj nacioj kaj tiam ilia parolo aldonis ĉiam pli kaj pli da seriozeco. Hungarujo, el kiu forrabis Ĉeĥoslovakujo kaj Rumanujo multnombrajn nacianojn kune kun la ampleksa teritorio kaj la abundaj materialoj de la nuturo!!! Jen la maldolĉa resento kaj domaĝo de tiu forrabita nacio superfluas en ĉiuj objektoj de la malvarma aŭtuno trans la vastega fluo de 'la Donau!'

Mi nur silente aŭskultadis ilian parolon kaj observadis laŭ la helpo de landkarto ambaŭ bordojn de la rivero monotonajn, sed tamen des pli sugestiajn.

Ĉe Esztergom, nia vaporŝipo trapasis sub la granda ponto, malrapide klinante sur la ferdekon sian kolosan fumtubon, el kiu dense eliradis nigra fumaro. Mi eksentis tra la surtuto agrable varmetan tuŝon de la fumaro.

Grandega kupolo staranta kvazaŭ giganto kun ambaŭ brakoj supren levitaj briletadis blindige. Ĝuste en la kontraŭa direkto, la suno jam estis subirenta malantaŭ la montĉeno Carpathian kaj disjetadis potencan brilon de la lasta momento. Kaj tie, ĉi tie ordostaris aroj da cedrosimilaj arboj.

S-ro Fanta prezentis min al la maljuna ŝipestro, kiu siatempe elpetis min ion enskribi en sia memorkajero. Foliumante la kajeron, mi ektrovis kelkliniojn da impreso, enskribitajn de japano, nomata 'Keiŝi Takahaŝi.'—naskita 'Macue-ano.' Tiu kredeble estis sendito de japana registaro pro iu pristudado. Mi tuj, sidante sur benko, ekprenis plumon kaj enskribis kiel jene:—

"Laŭ la vortoj enskribitaj de la alia japano—S-ro Takahaŝi el urbo 'Macue,'—li estis la unua japano, kiu subskribis en tiu ĉi kajero de la estro. Mi do povus esti la dua, kiu relegas lian impreson.

"Jam nun la lasta rebrilo de l' subiranta suno plene estingiĝis for de la montĉeno Carpathian kaj la ondoj susuras malvarme. Hodiaŭ nokte, kiel soleca vojaĝanto, en Budapesto mi sonĝos sonĝon ensorbitan en la eterne vekiĝantan, malgajan dormadon de la fluo de la Donau."

S-ro Fanta voĉe tradukis tion ĉi por la ŝipestro, dume S-ro Bihali kiu silente kapjesadis, subite ekprenis mian manon kaj diris:

"Mi akompanu vin al la hotelo."

暗示的。**kolosa** 巨大な。**fum'tubo** 烟突。**kupolo** 圓屋根。**giganto** 巨人。**blindige** 眼もくらむばかり輝しく。**sub'ir'onta** 沒せんとしつゝある。**mont'ĉeno** 山脈。**ord'o'stari** 列をなしてたつ。**cedro** 西洋杉。**sia tempe** 丁度その時。**memor'kajero** 記念帳。**foli'um'ante** 頁をくりながら。**kred'ebl'e** 多分。**send'ito** 派遣された人。**reg'ist'aro** 政府。**esting'iĝi** 消える。**susuri** サラサラ鳴る。**en'sorb'ita** (魂を)吸ひこまれた。**eterne** 永久に。**vek'iĝi** 目がさめる。**veki** は眼をさます。**Danau** はエス語では **Danubo** といふ。

FRENEZA DANCO

Unuakta drameto, originale verkita

de KOĴIROO NAKAGAKI

Personoj:	Pentristo (eksinstruisto)	35-jara
	Juna virino	20-jara
	Juna viro	27-jara
	Rizvendisto	40-jara

Tempo: Printempo.

Loko: Eksterurbo de Tokio.

Scenejo: Laborejo de la pentristo.

Fono estas muro, en kies mezo granda fenestro kun nigra kaj blanka kurtenoj; ĉe la fenestro granda kanapo; meze de la planko—tablo kun du seĝoj; dekstre pordo, eniro; maldekstre profunde pordo, kiu kondukas al najbara ĉambro; dekstre profunde en angulo—farbokesto, tolo, kadroj, apogilo k.t.p.; cetere mizera aranĝo konforme al malriĉa entristo.

— SCENO UNUA —

Pentristo, en malpura farbomakulita griza bluzo, sola sidas ĉe la tablo, prenas cigaredskatolon sur la tablo, ĝi estas malplena; serĉas en la poŝo kaj elprenas unu skatolon,—denove malplena, maltrankvile serĉas en tirkesto de la tablo, fermas ĝin kun krako; ĝemspiro; eltiras monujon el poŝo de pantalono; esploras la enhavon; Fi! ekkrias kaj jetas la monujon sur la tablon; sonas du tri kupraj moneroj; melankolia mieno. (*paŭzo*) El la tirkesto li elprenas harpincilon, komencas eltiri harojn de sia vizaĝo, rigardante speguleton sur la tablo. (*paŭzo*). Oni frapas la pordon, la pentristo streĉiĝas, aŭdiĝas virina voĉo de malantaŭ la pordo. "Ĉu sinjoro instruisto estas hejme?" Li ekstaras, iras tien kun ĝoja mieno kaj malfermas la pordon, aperas juna virino elegante vestita.

Virino—Bonan tagon, mia sinjoro! Pardonu al mi, ke mi ne vizitis vin longe! Kiel vi fartas lastatempe?

Pentristo—Ha, dankon, dankon! Mi estas tre ĝoja vin vidi, eniru!

Virino (*eniras, ambaŭ sidiĝas ĉe la tablo, virino elprenas papersakon plenan de kukoj el la paktuko, kiun ŝi tenis sur la brako, metas ĝin sur la tablon*).

Pentristo—Ho, vi alportis kukon! Ne estu tiel tro bona! Tamen mi tre dankas! Nu mi devas pretigi

tecn, sed mi tre bedaŭras, ke la teo al mi jam mankas! Ĉu vi tolerus kun blanka akvo? Nenio helpas, atendu! mi boligos.

Virino—Ne ĝenu vin, sinjoro instruisto! Mi prefere trinkos malvarman akvon!

Pentristo—Pardonu! Lastatempe mia afero iras tute malbone. (*Dirante tion li alportas kruĉon kaj du glasojn, komencas manĝi la kukojn avide*). Nu vi ricevis mian leteron, ĉu?

Virino—Jes, sinjoro, mi certe ricevis vian leteron, sed ĝi venis al mi tre prokraste, hodiaŭ matene, ĉar mi jam ne loĝas en la kafejo.

Pentristo—Ha, tion mi ne sciis. Kie do vi nun loĝas?

Virino—En la sama kvartalo, tamen ne proksime de la kafejo.

Pentristo—Ĉu vi jam ne servas en la kafejo?

Virino—Ne, sinjoro!

Pentristo—Kiele do vi kondukas la aferon? Ĉu vi trovis ian bonan patronon? Aŭ eble vi edziniĝis?

Virino (*iom konfuzite nur ridetas*)

Pentristo—Trafite? Ĉu vi….

Virino—Bonvolu esti tiel bona ne demandi pri tio! Mi estas malforta kompatinda virino!

Pentristo—Vi nun fariĝis feliĉa, ĉu ne? Se vi efektive edziniĝis, mi devas gratuli vin! (*Kun malgaja mieno*) Ĉu ne vere?

Virino—Ne diru tiel, mi petas! Mi ne edziniĝis. (*Mallevante la kapon, silentas momenton, kaj poste*). Li estas nur mia patrono, kiel vi esprimis; komence mi esperis, ke li edziĝos je mi, sed….

Pentristo (*kun nekaŝebla malagrableco*)—Ĉu vi estas trompita? Ĉu li jam ne estis senedzina?

Virino—Ne koleru lin, sinjoro instruisto! Mi estas kulpa en ĉio, mi estis tro malforta, sed mi petas, ke vi ne koleru ankaŭ pro mi! Kiel malfacile estas vivi kun pura konscienco, vi povas bone kompreni, por senkapabla senhelpa virino!

Pentristo (*mediteme*)—Ĉu via patrino ankoraŭ restas en la provinco?

Virino—Jes! (*silentas dum momento*). Ŝi multe maljuniĝis kaj malfortiĝis lastatempe, kaj ŝia profesia laboro fariĝis nun tro ŝarĝa por ŝi, tiel ŝi skribis al mi, kaj mi devis konsideri ankaŭ pri tio. Krom tio, la servado en la kafejo fariĝis al mi ne elportebla, vi eble ne povas imagi, kia estas la vivado de kelnerinoj en tia kafejo. Ĝuste en tiu tempo aperis antaŭ mi la homo, sub kies protekto mi nun vivas, kaj lia propono min allogis.

Pentristo—Ĉu vi loĝas kun li kune?

Virino—Ne, mi loĝas sola en aparta ĉambro de iu floraranĝistino. Li vizitas min de tempo al tempo.

Pentristo—Nome, kiel kromvirino, ĉu ne?

Virino—Jes, mi tre hontas, ke mi ne povas nei tion.

Pentristo—Hm, tamen ne hontu tion, se vi nur lin amas.

Virino—Viaj vortoj estas tro akraj por mi, jes, komence mi estis tre feliĉa, ĉar mi amis lin kaj havis esperon edziniĝi je li, sed eksciinte cirkonstancojn kaj lian tutan konduton, mi tute malesperiĝis kaj ne povas lin ami kiel antaŭe.

Pentristo—En tia okazo, vi devas pripensi, vi devas klopodi iel liberiĝi de li. Kia homo li estas?

Virino—Filo de iu potenca politikisto. Tial, laŭ lia diro, liaj gepatroj ne permesas preni min kiel lian edzinon, kvankam li estas ankoraŭ senedzina junulo.

Pentristo—Mi komprenis! (*forta malagrableco montriĝas sur lia mieno*) Antaŭe vi ĉiam venadis al mi por peti mian konsilon. Mi tre bedaŭras, ke vi ne sciigis al mi pri tia gravega afero. Ĉu vi ne pensas pri tio, kiel mi ĉiam deziras al vi feliĉon? Kiel mi forte deziras vian feliĉon, ĉar vi estas sola homo, kiu ĝis nun tenas intimecon kun mi el miaj amataj gelernantoj. Kvankam mi vivas tiel mizere, kiel vi vidas, tamen mi spertis iom pli multe ol vi en la mondo. Mia zorgo ne farus al vi ian malutilon. Tamen, nenia helpo! Kio pasis, jam ne revenas. Ne pensu, ke mi vin riproĉas, ne ĝeniĝu!

Virino (*per naztuko viŝas la okulojn*)—Dankon, mia bona sinjoro! Mi neniam forgesas viajn zorgojn. Mi

nun pentas, ke mi ne volis peti vian konsilon. Tiam, konfese, mi timis, (*kun maldolĉa rideto*) ke vi estus tro severa, ĉar mia nesperta juneco tiel forte esperigis al mi edzinan feliĉon, ke mi forgesis gardi min de l' malĉasta intenco de l' viro.

Pentristo (*faras senkonscian serĉadon en siaj poŝoj, maltrankviliĝas, ellasas longan spiron, ekstaras, iras al la najbara ĉambro, revenas kun duoneluzita cigaredo en la buŝo kaj ekbruligas*)

Virino—Pardonu, sinjoro! Al vi mankas cigaredo, ĉu ne? Mi iros aĉeti. (*Rapide eliras*)

Pentristo—Ha, mi nur dankas!

— Sceno Dua —

Pentristo (*Vagante en la ĉambro*)—Ĉu mi ankaŭ devas honti antaŭ ŝi? Ŝajnas, ke mi pikis ŝin tro forte, tamen pesto forprenu la viron, kiu difektis mian Minjon! (*denove sidiĝas, manĝas kukojn, trinkas akvon abunde. Dume aŭdiĝas de ekster la pordo vira voĉo diranta:* *Ĉu Sinjoro Sasaki estas dome?*

Pentristo—Kiu ĝi estas? (*La pordo malfermiĝas kaj aperas rizvendisto kun polvokovrita vizaĝo kaj vesto.*)

Rizvendisto—Ha! Pardonu min sinjoro! Mi alportis la kalkulon.

Pentristo—Kalkulon?—Ĉu vi ne alportis rizon, kiun mi mendis antaŭ hieraŭ? Speciale por tio tiam mi

pagis kvin jen', ĉu ne? Ĉe mi restas plu neniom da provizo; de hieraŭ mi ne povis kuiri.

Rizvendisto—Tion mi ne scias, mi nur bedaŭras, ke mi ne povas plu alporti al vi, ĉar via ŝuldo iom tro grandiĝis. Mi estas malriĉa vendisto, krome ekonomia krizo lastatempe multe turmentas min.

Pentristo—Tion mi ne scias, mi nur esperas, ke vi plenumu la promeson, kiun vi faris kun mi antaŭ hieraŭ.

Rizvendisto—Sed en tia okazo, via ŝuldo neniam malgrandiĝas.

Pentristo—Nenio helpas, ĉar mi ankaŭ turmentiĝas pro la ekonomia krizo. (*Dume la virino revenas kun kelkaj skatoletoj da cigaredoj, la rizisto esplore okulaĉas la virinon*)—tamen, ne ĉiam mi restos tiel senmona; se mi akiros tiom da mono, mi tuj pagos al vi, alportu do almenaŭ duonon de tio, kion mi petis, ĉi tiun fojon.

Rizvendisto—Mi ne povas.

Pentristo—Ĉu vi nur postulas pagon kaj ĉesos plu alportadi rizon al mi?

Rizvendisto—Nenia helpo!

Pentristo (*kun ĝenita rideto*)—Tiam mi devas aĉeti de alia rizisto, kaj al vi mi pagos plu neniom, ĉar mi ne povas vivi sen rizo.

Rizvendisto (*altigas la ŝultron, montras koleron malkaŝe en la vizaĝo, preskaŭ krias per akra laŭta voĉo*)—Ĉu vi diras, ke vi ne pagos plu?

Pentristo—Kion vi faros, se mi ne volus pagi?

Rizvendisto—Ne mankas rimedo, mi konfidos la aferon al iu peristo! La leĝo ankaŭ ekzistas por tia okazo!

Pentristo (*indigno montriĝas sur lia vizaĝo, sed tuj anstataŭas ĝin ironia rideto*)—Ha, ha, ha! Bone! Faru kiel vi volas kaj povos! Tamen vi devas ekscii, ke mi estas tro malriĉa por persekuti laŭleĝe, ĉar, kiel ajn la leĝo estus potenca, ĝi ne povus eldevigi el la mano de homo, kiu havas nenion. Kiel ajn la aferisto estus severa, ne povus forpreni ion el nenio. Vidu, kio estas en mia domo. La pentrilaro kun manko de kelkaj farboj, malplena rizkesto, nesufiĉaj kuiriloj kaj manĝiloj, mizera litaĵo, malnova tablo kun du seĝoj kaj tiel plu, estas mia tuta posedaĵo. Kaj tiajn objektojn escepte nur la tablon kaj seĝojn, eĉ leĝo protektas por mi. Mi lasos vin traserĉi tutan domon, vidu per viaj propraj okuloj, se vi ne kredas min.

Rizvendisto—Tion mi ne bezonas.

Pentristo—Al mi ŝajnas, ke vi volas hontigi min per la ŝatinda laŭta voĉo antaŭ tiu ĉi sinjorino, sed ŝi jam de antaŭe bone konas mian mizerecon! Estu pli saĝa min ne kolerigi! Konsideru, ke senhaveco estas firma fundo, de kie oni plu ne povas fali, nek subiri. Viaj malspritaj minacoj min ne timigas.

學會より

本欄に於て學會庶務會計部の內情を聊か申上げ日頃の行屆かざる點の御諒承を乞ふと共に當部の希望を申述べ皆樣に何分の御考慮を御願ひする次第である。當部の分擔事務は文書受付整理竝に發送、會員名簿管掌、機關誌及書籍の發送、會計簿保管、基本金管理、財産保管、郵便振替事務の處理、豫算、立案決算報告書作成、主務官廳への事業報告、其外一般雜務事項で有りますが、扨以上の事務を處理する爲めに有給の專任事務員が一人でも置いて有るかと言ふと遺憾ながら無いので有ります。然し無くても過去十年の歲月を大過無く以て今日に及んで居るので有ります。これは從來より幾多の熱心なる同志諸君が入代り立代りエス語運動確立の爲めに本會の下僕となりて學業或は職務の餘暇を裁いて處務に獻身されて居るからで有りますとは言へ今後益々本會の事業は健實なる發展に伴ひその事務も從つて複雜に成つて來ます事は明らかで有ります。そこでどうしても此上尙一層皆樣の御理解と御援助を受けないと事務が圓滑に參らないので有ります、例へば本會活動の唯一財源である會費の拂込を前金切にならぬ前亦は前金切の通知を受けられたら返折し御拂込下さる等は非常に當部の手數が省けるのです。從來より會費前金切の場合はその切れる月よりレヴォ誌發送封筒面に前金切なる朱印を押し且つ振替用紙を挾込んで二ケ月程續けて御知らせし御拂込が無い節は別に書狀を以て更に拂込方を督促し且つ尙拂込が無い場合は集金郵便を差向けて居るので有りますが之も拒絕された場合は不止得除名の形式を採つて居るのです。集金郵便の方法は差向けられた方でも可成氣分の良いもので無いでせうが出す方でも厄介なもので其上支拂拒絕をされた場合は料金を遞信省に取られて仕舞ふので何により辛い仕事の一つです。集金は規則に依つて一口3.00圓以下は取扱はず普通會員には一ケ年と二ケ月半卽ち2.90圓それに集金料0.10圓を附加3.00圓とします、正會員には一ケ年分3.00圓に集金料0.10圓を加へ3.00圓と致しますから御支拂下さると學會は非常に助かるのです。總て學會への送金は振替を御利用下さる事が尤も確實です只振替は貯金局へ經て通知が來るので多少時日を費しますが裏面の通信には要件の記載が出來ますから便利です、それで送金の要旨をはつきりと記入願ひます。會費請求を間違つて往々既納者に差上げる事も無いとは限りませんから其節は一應御照會願ひます、次に振替にて書籍の注文をされた場合に可成日數を要しますので不安を感ぜられ御照會下さる方が有りますが上記の樣な譯と事務の關係で若干發送が手間取る事が有りますので此點何卒御含みの上御寬容の程を願つて置きます。次に本年度より學會が直接洋書取次開始致しましたが初めての試みで有つて購買者の意向もわからず取寄部數にも限りが有つて御猶豫を願ふ等の不始末を致して居りますが併せて御詫申上げます。追々と皆樣の期待に沿ふ樣に努めます。轉居された節は新舊住所明記速に御通報下さい、又都合に依り退會される場合等も御通知下さる事を御願して置きます。御通知が無く且つ會費でも切れて居りますと當部としては前述の如く無駄な骨折をしなければならないのです。

會員の聲

奇麗に簡單に出來る綠星旗の造り方

ピクニーコの折、或はカフエーヨなどに於けるクンベネーノの折、綠星旗を持參し或は卓上に立てゝおく事は非常に宣傳に有利であります。旗には綠星のみならず、どうしてもエスペラントと云ふ字を書き加へておかないと効力がありません。毎土曜、銀座明治製菓喫茶部の二階で催されて居る自由會合に於ては卓上の小旗が如何に雄辯にエス語を宣傳して居る事でせう。其處で、如何なる小さな集りも夫々クラブ名入りの綠星旗を造つて其を有効に使つて頂きたい。これから其の染め方をお敎へします。

布地は隨意ですが絹物、麻、モスの類が一番よいでせう。先づ所用の旗地の下へ、下圖の紙を敷く。次に皿へ蠟(何の蠟にても宜し)を溶かし、トロ火に掛けたまゝ新しい筆にて染めてはならぬ部分を塗る。これは全部塗る必要はありません。染める部分を染めない部分の輪廓を四分程ぬればよいのです。ですから文字を綠地に白くぬく時は文字を蠟で書き綠地と星を取り圍む白地との輪廓を四分程蠟でぬればよろしい。蠟書が出來たらアルス染料を適當に水でうすめて筆で染めます實は此の染料があるので蠟染めの樣な簡單な染色が出來るのです。此のアルス染料は書いた丈で完全な染色が出來ますからそれ以上

蒸したりする必要がありません。販賣元は、東京日本橋區小舟町一、桂屋商店で、色は十二色、小瓶（座蒲團位の旗ならば十枚以上出來るでせう）廿五錢です。地方の方で手に入れる事の困難な方は私の處へ送料（六瓶迄十二錢）共小爲替で代金を送つて下されば便宜御發送致します。

綠は二倍以上水で薄めないと濃過ぎていけません。染料を含ませたら火で乾かさないで自然に乾かし、其れを新聞紙三四枚上下の中にはさんで上からアイロンを掛けると蠟がすつかりとれます。片側から染めた丈でも結構ですが、兩側から染めたい時は裏側から又染料をぬります。併し此の時は蠟が完全に裏迄透つて居ないと奇麗にあがりませんから、注意して塗る處以外に筆を走らせない樣にするか、或は裏から又同じことを繰りかへすかで併し片側丈で立派な旗が一時間位で出來上ります。四五人のクラブでもクラブ名入りの綠星旗を造つて大いに利用して下さい。（東京市外瀧野川田端五〇〇番地　大橋介二郎）

★ R. O. 誌編輯上の希望 ★

★本誌に毎月連載の講座もの卽ち初等、中等、文法講座等又和文添削欄はなるべく切りとつて保存する必要上奇數頁から偶數頁に終る樣にしていたゞきたく存じます。學會では同誌を一年分合本にする方針の樣ですが我々勉學者にとつてはその方が好都合です。又初學者同志貸し合ふのにお互に便利だと考へます。この事は今後の講座に於てぜひ實行して戴きたく思ひます。そしてこれは不可能かもしれませんが出來れば最後の文藝もののエス譯も（例へば三月號の「一休の一日」の如き）本誌をほどいて折りたたんだなら小さいパンフレツトになる樣に印刷していたゞいて自分で表紙をつけて保存するといふ樣なことがやれると非常に便利ですが。このことは折りたゝんで頁が都合よくゆく樣にするため編輯上大變面倒かと思ひますが一つ骨を折つていたゞけないでせうか。他の諸君の御意見承りたし。（神奈川縣　伊藤幸太郎）

★編輯部より——本誌の各原稿を奇數頁から偶數頁へくむといふ事は手數の上では別になんでもない事なのです。この事はもと元學會理事の何盛三氏もよくいつてをられ一度そういふ風にして見たのですが併し雜誌を切拔いて保存せられる人は會員の中のごく少數の方で大部分は雜誌を雜誌としてお讀みになる方が多いのです。雜誌を毎月毎月讀む人にとつては奇數頁から偶數頁へかいてあるより偶數頁から奇數頁へかいてある方が數倍便利ですそれで當部では大變努力して各原稿とも偶數頁から奇數頁へ組む樣苦心してゐるのです。それで貴下の樣にお考へになる方々にとつては大變お氣の毒ですが併し本誌は先づ雜誌である事が主體ですからこういつた樣にした方がよくはないかと思ひます。我々がよく買ふ〇〇講座といつた樣な講義錄體のものは大抵お說の樣な編輯ぶりですが編輯者としてはそれの方がずつと努力を要せないし寄稿家の方も至極のんきでよいのです。といふのは毎月きりとつて保存する樣に二頁分原稿をかく事にすれば話をどんな途中で切つても差支へない事になつてくるからです。毎月讀み切（初等講座の如き）にするためにはらふ努力は可成苦しいのです。卽ちお說の樣に編輯する事は我々編輯者にとつては却つてありがたい事ですが、これ迄もいろんな方々の御意見で雜誌はどこまでも雜誌で講義錄でないから毎月切りとつてとぢあはせる樣な講義錄的なやり方は本を賣る樣でよくないといはれた事が多かつたので現在の樣な狀態になりました。

本誌の終にある日本の文藝ものその他のエス譯文も實をいへば貴下の御意見の樣にその頁だけやぶつて保存する樣に組んだとて別に大した努力もいらないのですがそうするとやはり上述の樣な非難をうける事が多いのです又貴下の樣に熱心にその雜誌を切りとつて折りたゝんでとぢあはされる人ばかりですとよろしいが大抵の方はそんな面倒な事をされませんから貴說の如く印刷すれば雜誌のまゝでは讀みにくゝなつてだめなのです。本誌を雜誌として一度よまれた後で又パンフレツトの如く單行本の如く活用される事は我々編輯子にとつては大變ゆかいです（一つの原稿をそれほど活用していたゞく點に於て）が上述の樣な事情で貴說の如き編輯には大きい反對がありますからやはり雜誌は雜誌の體裁をとるより方法がないと思ひます。

併し何にいたしましても本誌へ揭載した原稿はすべて紙型として保存してありますから講座ものや文藝もの等は他日又單行本として二度の勤めをする筈ですから（その時は雜誌に一度だして紙型にしてあるので費用がやすくなりますから低廉な價で賣れます）その時瀟洒たる單行本となつたのをお買ひ求めねがひたいと存じます。雜誌はやぶらずに雜誌のまゝで保存される時は大きなエス運動史の紀念物となります。本誌の一年分の合本を學會でうるのもその意味からです。學習用といふよりも historiaĵo としての價値からです。

☞ 學會取次洋書目錄 ☜

★洋書は如何なる場合でも前金註文でなければお送り致しません★

〰〰 ザメンホフ博士譯著書 〰〰

定價圓(送料錢)

★Fundamenta Krestomatio 1.30（8） ★Marta 1.30（8） ★La Batalo de l' Vivo 0.55（4） ★Rabistoj 0.80（4） ★Revizoro 0.80（4） ★Ifigenio en Taŭrido 0.80（4） ★Hamleto 0.70（4） ★Rabeno 0.55（4） ★Rakontoj el Biblio 0.30（2） ★Georgo Dandin 0.45 (4) ★Andersen, Fabeloj I 0.80 (4) ★Lingvaj Respondoj 0.70 (4)

〰〰 エスペラント原作文藝その他 〰〰

★Vivo de Zamenhof D-ro Privat の流麗な筆になるザ博士傳、人類人主義の聖典、萬人必讀の書、英國版上製(邦譯『愛の人ザメンホフ』あり）…1.60（6）

★Historio de Esperanto D-ro Privat 著、敍述流達、上卷：1887-1900年；下卷：1900-1927年…上卷 0.85 (4) 下卷特上製 3.10（6）

★El la Intima Libro Ada 氏等ブルガリヤエスペランチスト諸家の隨筆集…………0.30（2）

★Malriĉa en Spirito 原作界の大家 Bulthuis の二幕の劇………………0.30（2）

★Rememoroj de Esperantisto 講習會好適、十部以上註文は一割引送料當方持………0.40（2）

★Mirinda Amo Luyken 作、偉大なる母愛、純なる乙女の愛………………1.90（8）

★Pro Iŝtar 處はアラビヤ、時は紀元前、Luyken 力作の大衆文藝………………3.65（8）

★Lilio 女流 esperantisto として有名な Sinnotte 夫人の原作小説………………1.35（6）

★ Saltego trans Miljaro 原作界の麒麟兒 Jean Forge 作、奇想天外………………2.85（8）

★Abismoj 構想の奇、描寫の妙、行文の輕、Jean Forge 出色の傑作………………1.55（4）

★Landoj de l' Fantazio Heroldo 誌主幹 Jung 作、意表に超絶、………………上製 2.65 (12)

★Jozef kaj la edzino de Potifar Bulthuis 近著大作………………並製 1.70（10）

★Laŭroj 嘗て文藝雜誌 La Revuo の懸賞に當選した原作名作集………………0.80（4）

★Prozo Ridetanta 諧謔作家 Schwarz の散文數篇を輯む………………1.50（6）

★Verdkata Testamento Schwarz 氏得意の壇上、諧謔詩集………………1.00（8）

★Krioj de l' koro 雄辯界の一人者 Grenkamp が青春の詩集………………0.15（2）

★Vortoj de Cart エス學士院長キヤール教授著論說集、眞乎名著………………1.10（6）

★Rompantoj Valjes monologoj 五篇を輯む、身振の寫眞入………………0.40（2）

★Tri Angloj Alilande 英國三人男海外旅行奇談、抱腹絶倒………………0.55（2）

〰〰 世界文藝名作の飜譯 〰〰

★Venecia Komercisto 沙翁劇ベニスの商人、人肉裁判、Wackrill 譯………………0.80（4）

★La Reĝo Lear 末娘に救はれる悲慘なリヤ王の運命、沙翁悲劇………………並製 1.45（6）

★Songo de Somermeza Nokto 沙翁劇「眞夏の夜の夢」………………0.40（2）

★Palaco de Danĝero 妖艷 Pompadour 夫人の戀愛葛藤、Payson 譯………………3.10（6）

★Faraono 地も燃ゆる古代埃及王ファラオの戀。全三卷 630 頁大作………………3.20（16）

★Luno de Izrael 大衆文學作家として有名な Haggard 作、Payson 老譯………………1.90（6）

★Aspazio Svjentoĥovski 作 Leono Zamenhof 博士譯の悲劇………………0.80（4）

★Tatterly 奇々怪々探偵小説 Tom Gallon 作、Wilson 譯………………0.55（4）

★Bukedo (I, II) 原作及び各國語より譯の文藝作集………………二册で 0.60（4）

★Tagolibro de Vilaĝ-pedalo Blicher 作、Bulthuis 譯、人生の指針………………0.30（2）

★Stranga Idilio 記憶を失つた男の奇しき物語、譯文頗る平快………………0.30（2）

★Vojaĝo interne de mia Ĉambro Xavier の隨筆、哲味横溢………………0.25（2）

★Interrompita Kanto 王子と少女の戀、オルゼシコ女史作、Kabe 博士譯………………0.25（2）

★La Marŝparulo オーストリヤの知名作家 Raimund 作の三幕物、美本………………1.00（2）

★Aventuroj de Kalifo Alraŝid アラビヤ夜話よりの一篇、Cox 將軍譯………………0.15（2）

★Improvacio de Konrad ポーランドの詩聖 Mickiewicz 作、Grenkamp 譯………………0.15（2）

★Penseroj 世界の哲人文豪等の片語金言、Grenkamp の譯筆………………0.20（2）

★L. Tolstoj : Tri Rakontoj 宗敎々訓の物語、Sidlovskaja 夫人譯………………0.85（2）

★ザメンホフ博士肖像畫 0.25（4）

～～～ Ilustrita Biblioteko 叢書 ～～～

Angreni は 0.50（2），他は 0.25（2）

Devi Angreni ジヤバの物語

Ribelemaj Virinoj 王昭君物語(劇)

Sakuntala 印度物語

Mil kaj unu Noktoj アラビヤ夜話

～～～ Internacia Mondliteraturo 叢書 ～～～

各册 0.70（4） 但し倍號は 1.40（6）

Hermano kaj Doroteo, Goethe

Legendoj, A. Niemojewski

Elektitaj Noveloj, Turgenev

La Nigra Galero, W. Raabe

El la Camera Obscura, Hildebrand

El la Skizlibro, Wash. Irving

La mirinda historio de Schlemihl

Nuntempaj Rakontoj, Samatov

Deklaracio, T. Ariŝima (倍號)

Ses Noveloj, Allan Poe

La firmao de la kato, Balzac

Orientaj Fabeloj, Doroŝeviĉ

Noveloj, Sienkiewicz

Insulo de feliĉuloj, Strindberg

Barbaraj Prozaĵoj, Bertrana

Ano de l' ringludo, Ŝimunoviĉ

Hebreaj Rakontoj, Ŝalom-Aleĥem

Tri Noveloj, Puŝkin

Servokapabla! Marcus Tybout

～～～ Esperanta Biblioteko Internacia 叢書 ～～～

各册 0.18（2） 但し Japanaj Rakontoj は 0.36（2）

Bona Sinjorino, E. Orszeszko

Rusaj Rakontoj, M. Sibirjak

Don Kiĥoto, Servantes

Japanaj rakontoj, Ĉif (倍號)

Amoro kaj Psiĥe, Apulejus

Bulgaraj Rakontoj, Vazov

Komerca Korespondo, J. Borel

Konsiloj pri Higieno

Reĝo de la Ora Rivero, Ruskin

La Lasta Usonano, Mitchell

La Instituto Milner, J. Jullien

La Patrino, Ernst Zahn

La Amkonkurantoj, Schimdt

～～～ 科 學 社 會 商 工 業 ～～～

★Monadologio de Leipniz ライブニッツのの單元論、譯は故學士院長 Boirac 博士……0.20（2）

★Eklumo en Abismo Henri Barbusse の論文、歐洲の將來……………………0.45（2）

★Sendanĝereco de Francujo 外交裏面史前佛國大臣 Honnorat 著……………0.50（4）

★Antikva Romo Surmare 英雄か奸雄か世界の大立物 Benito Mussolini の著………1.00（6）

★Komerca Vortaro 商業語辭典(エスペラントで解釋) 上製……………………1.45（4）

★Vendreda Klubo 獨逸エス界知名十一大家の論文を輯む……………………1.25（4）

★Bahaj Instruoj 世界の新宗教バハイ宗の啓示……………………………0.05（2）

～～～ 學 習 用 書 辭 典 類 ～～～

★Tra la Jaro 自然教授法式による各國人用老幼向の教科書、輸入……………………1.10（4）

★Universala Esperanta Lernolibro Möbusz 著各國人用、教師用書を付す。二册で…1.85（4）

★Esperanto Teacher ……………0.55（4）

★Grammar and Commentary………1.90（6）

★エス佛大辭典 ……………………0.80（4）

★Millidge: エス英大辭典 ………4.30（8）

★Rhodes: 英エス大辭典 …………2.00（12）

★Edinburgh エス英・英エス辭典 …0.90（2）

★Vocabulair Technique et Technologique Francais-Esperanto ……………………0.55（8）

★Oficiala Klasika Libro エスペラント語彙解釋(佛英獨)必携……………………0.40（2）

★Refleksiva Pronomo en Esp. Akademio 文法部長 Lippmann の研究發表…………0.25（2）

★Supera Kurso 高等研究教科書、言語委員 D-ro Dreher 著 ……………………0.45（2）

～～～ 新 着 書 ～～～

★Rudolf Mosse の Biblioteko Tutmonda 叢書 Serio I (6册) Serio II (5册) 各 Serio 2.00（8）

★Sep Rakontoj 古い E-isto Ivan Malfeliĉulo 原作短篇集 ……………………0.55（4）

★Karto Mistera Cleveland Moffett 作 Payson 老譯小說 ……………………0.30（2）

★Perdita kaj Retrovita 故エス學士院長 Boirac 博士原作 ……………………0.10（2）

★Portreto 露文豪ゴーゴリ作小說、譯は Andreo Fiŝer 故摸範的 ……………………0.55（4）

★Reĝolando de l' Rozo Arsène Houssaye 作小說、譯は P. Champion………………0.20（2）

★Ruĝa Floro 露文豪ガルシン作小說、K. Boguŝeviĉ 譯 ……………………0.10（2）

★Mimi 戰爭中の巴里カルチエルラタンの生活、Payson 老譯 ……………………0.40（2）

★Pri la Origino de l' Homo 人類の起原と進化、Arthur Keith 著 ……………………0.95（4）

KORESPONDA FAKO

★Japanujo:—S-ro Jutaroo Katoo, Kijohoriĉo 4, Higaŝi-ku, Osaka, kĉl IP. L. G, nepre resp.

★Japanujo:—S-ro Nishida Shiro, 114 Kasugaeĉo I-ĉome, Mijakeĵima, Kitaku, Osaka; kĉl. L.

★Rusujo:—S-ro Ĥarlamov Aleksandr, Serpuĥov, Moskva gubernio, Kaluĵska ul. domo 89; 日本勞働者と文通希望。

★Japanujo:—S-ro K. Horiuĉi, Hatagaya-8, Yoyohata-maĉi, Tokio; kĉl. kiuj havas intereson pri la studo de historio de internac. lingvoj.

★Japanujo:—S-ro Makoto Kaŭabe, N-ro 135, Jûsan-nishino-machi, Higashiyodogawa-ku, Osaka; kĉl. precipe k. rumanoj, belgoj, svedoj, hispanoj.

★Japanujo:—Ŝimazaki-Toŝikazu, 239, Fuĵioka-maĉi, Gummaken; L, IP.

La Revuo Orienta—Monata Organo de Japana Esperanto-Instituto,
Ŝin'ogaŭamaĉi III-15, Uŝigome, TOKIO, Japanujo; abono internacia 7 svis. frankoj.

昭和四年五月一日發行（毎月一回一日發行）
エスペラント研究雜誌ラ・レヴオ・オリエンタ第十年第五號

我國に於けるエスペラント普及・研究・實用の中心機關

財團法人日本エスペラント學會

【東京市牛込區新小川町三の十五】【振替口座東京11325番】

◆すべての運動は大衆の協力に俟たねばならぬ。今やエスペラント普及運動は最も多衆の協力を必要とする時だ。各地同志の大同團結が必要だ。個々人の叫びは個々人の叫びにすぎない。大衆の叫びは輿論の喚起だ。組織だつた協力こそ眞の力だ。
◆エスペラントを愛するものは誰しも御入會下さい。（會員は法規上維持員とよぶ）

目的 エスペラントの普及、研究、實用

事業
(a) エスペラントに關する各種の研究調査及其發表
(b) 雜誌及圖書の刊行等
(c) 講演會、講習會の開催及後援
(d) 其他本會の目的を達成するに必要と認むる事業

會費
(a) 普通維持員　年額2圓40錢　(b) 正維持員　年額3圓
(c) 贊助維持員　年額5圓　(d) 特別維持員　年額10圓以上
(e) 終身維持員　一時金100圓以上

入會手續 住所、職業、姓名（振カナ附）を明記し會費一年分を支拂へばよい。（振替送金最も安全）

會員の特典
1. 毎月研究雜誌"La Revuo Orienta"の配布をうく
2. 出版圖書の割引をうくることあり
3. 語學上の質疑其他一般の問合の返事をうく
4. 宣傳の「栞」その他宣傳材料を無料でうくることを得

詳しいことは直接お問合せ下さい

役員名簿（五十音順）

理事長	理學博士	中村精男	理事		美野田琢磨
理事		秋田雨雀	同	慶大教授醫學博士	望月周三郎
同		上野孝男	同	東京朝日新聞顧問	柳田國男
同	東京女子大學教授	河崎なつ	同	鐵道技師	小坂狷二
同	中央大學教授	川原次吉郎	同		大井學
同	帝大教授文學博士	黒板勝美	同		三石五六
同	政治教育會長 專修大學教授	小林鐵太郎	監事	高層氣象臺長	大石和三郎
			同	東京府會議員	木崎宏
同	帝大名譽教授 文學博士	高楠順次郎	同		清水勝雄
同	東京朝日調査部長	土岐善麿	顧問	帝大教授 法學博士 男爵	穗積重遠
同	帝大教授醫學博士	西成甫	同	子爵	三島章道

本誌購讀料（郵税別）

一部	圓0.20	學會持維員には無代頒布す
半年分	圓1.20	
一年分	圓2.40	

本會振替口座番號
一般　東京 11325番
會計用　長野 3283番
基本金專用　東京 32089番

昭和四年四月十五日印刷
昭和四年五月一日發行
編輯兼發行人　東京市牛込區新小川町三ノ一五　大井學
印刷人　東京市神田區三崎町三ノ一四六　高見澤保芳（一匡印刷所）
發行所　東京市牛込區新小川町三ノ一五　財團法人日本エスペラント學會

定價貳拾錢（送料貳錢）